Nuclear Weapon & Nuclear Test MONITOR

核兵器・核実験モニター

軍事力によらない安全保障体制の構築をめざして

238
05/7/15

毎月2回1日、15日発行
1996年4月23日
第三種郵便物認可

\200

発行■NPO法人ピースデポ／PCDS（太平洋軍備撤廃運動）:Pacific Campaign for Disarmament and Security
223-0051　横浜市港北区箕輪町3-3-1　日吉グリューネ102号
Tel 045-563-5101　Fax 045-563-9907　e-mail：office@peacedepot.org　URL：http://www.peacedepot.org
編集責任者■梅林宏道・田巻一彦　郵便振替口座■00250-1-41182「特定非営利活動法人ピースデポ」
銀行口座■横浜銀行 日吉支店 普通　1561710「特定非営利活動法人ピースデポ」

創刊10周年記念特集号

励ましに感謝、これからも頑張ります

「核兵器・核実験モニター」は1995年7月15日、第5回NPT再検討会議を契機に創刊されました。冷戦後の核軍縮の気運と、その最中における中国とフランスの核実験再開への世界的な抗議の嵐の中で、世界の核兵器と核兵器廃絶運動に関する正確な情報とそれに基づく視点を提供することを目的として、刊行を開始しました。そのことによって、日本の反核運動が国際政治への関与を深め、人類の最優先課題とも言うべき核兵器廃絶へのより有効な水路を発展させることに貢献したいと考えました。以来、多くの方々の協力と支援を頂きながら、基本的に月2回の定期発行を持続して参りました。

200号を契機に、題字の下に「軍事力によらない安全保障体制をめざして」という副題を掲げました。そして、私たちが全体として目指している目標を明確にし、東北アジア地域安全保障の問題にも積極的に挑戦をしています。力量を量り、本誌の方針としては「浅く広く」になることを戒めながら。

10周年記念号にコメントをお願いしたところ、多くの方々から高い評価と、暖かい励ましと、有益な示唆を頂きました。儀礼的な祝辞ではなく、内容を的確に捉えて下さった数々の言葉に強く感銘を受けました。

私たちは、気分を一新して、より充実した紙面を目指して頑張る所存です。今後ともよろしくお願いいたします。また、読者拡大にぜひご協力下さい。

2005年7月15日
梅林宏道
田巻一彦
中村桂子
秋山祐子

今号の内容

10周年記念に寄せて
◆広島・長崎・被爆者…4
秋葉忠利／伊藤一長／緒方　毅／沢田昭二／田中熙巳／平岡　敬／森口　貢／森瀧春子
◆国会議員・市長…6
金田誠一／河野太郎／斉藤つよし／鈴木恒夫／照屋寛徳／土井たか子／伊波洋一／松崎秀樹
◆憲法・国際政治・平和学…8
浅田正彦／荒川　譲／安斎育郎／岩島久夫／岡本三夫／金子熊夫／黒澤　満／古関彰一／小林直樹／杉江栄一／豊下楢彦／藤田明史／藤田秀雄／藤原　修／山根和代／吉田康彦
◆ジャーナリスト・編集者…12
岩垂　弘／大石芳野／岡本　厚／桐生広人／下谷内奈緒／中馬清福
◆オピニオン・リーダー…19
新崎盛暉／宇井　純／小川和久／國弘正雄／清水澄子／関千枝子／竹村泰子／槌田　劭／原不二子／湯川スミ／湯川れい子
◆科学者…21
猪野修治／小出昭一郎／佐々木健／白鳥紀一／菅沼純一／鈴木達治郎／豊島耕一／服部　学／藤田祐幸
◆市民運動・NGO…24
赤石千衣子／川端国世／呉東正彦／澤田美和子／杉山百合子／鈴木克治／高橋紀代子／竹内宏一／西尾　漠／野間伸次／松井和夫／安田和也／山中悦子
◆仲間たち…27
有地淑羽／池田佳代／大澤一枝／大滝正明／高木規行／高名晶子／水野希代子／薮　玲子／山口　響

新連載：「被爆地の一角から」土山秀夫…3
本誌10年のあゆみ…14
米軍再編と中央アジア…2
PNND日本・第3回総会開催…2

米軍世界再編

中央アジアでつまずく

―米国、2国間交渉に希望をつなぐ

いわゆる「蓮の葉」戦略に基づく米軍の世界的再編（GPR）において、中央アジア、東ヨーロッパ、西アフリカが、新しい基地ネットワーク構築の対象地として注目されていた。その中の中央アジアにおいて、米国は大きな障害に直面した。

7月5日、上海協力機構（SCO。ロシア、中国、カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、タジキスタンの6か国）はカザフスタンのアスタナで会合した。その時に出された共同声明は、アフガニスタンにおける反テロ作戦が一段落を迎えつつあるとして、地域からの米軍の撤退期限を定める必要があると主張した。

その直後の7月10日、キルギスでは政変でアカエフ政権が倒れた後の大統領を選ぶ選挙が行われた。新大統領になったクルマンベク・ベキエフは、キルギスに駐留している米軍について、「撤退の時期を検討してもよい時だ」と述べたことが伝えられた（7月11日。AP、朝日など）。キルギスには、GPRで作られようとしている安保協力地点（CSL）の典型的候補であると言われているマナス空軍基地がある。

しかし、もともとキルギスは米軍長期駐留に否定的であった。米国にとって、もっと打撃が大きいのは、これまで米軍の長期駐留、ないし将来の使用協定に協力的であるとされてきたウズベキスタンが、上海機構の共同声明に忠実に反応したことであろう。SCO共同声明の2日後の7月7日、ウズベキスタン外務省は声明を出して、アフガン攻撃に提供してきたカルシ-ハーナーバード空軍基地は、タリバン政権打倒の作戦にのみ米軍使用を意図したものであったと述べ、「米軍の将来について再考する」と述べた（AP）。

これらの動きについて、米国は敏感に反応した。7月12日に駐モスクワ米大使は、基地の将来は「2国間協定によって決定される」と述べ、ロシア、中国の影響下にあるSCOの干渉に左右されない意向を強調した（RIAノボスチ通信社）。

この状況が、米国がこの地域で強めようとしている、いわゆる人権外交への警戒心から発生している面が強いことに注目しておきたい。（梅林宏道）Ⓜ

核軍縮議員ネットワーク 39人から68人に増加

核軍縮議員ネットワーク（PNND）日本の第3回総会が、7月6日、第1衆議院議員会館で開催された。昨年11月の総会でネットワーク議員の再募集を行うことが合意されたが、その結果を報告し新しく役員を選ぶことと、NPT再検討会議の結果について専門家の話を聴き、今後の方針について意見交換することが主たる議題であった。

ネットワーク参加議員の募集は、NPT再検討会議を前に、4月10日に全国会議員に要請文書を配布することによって行われた。新規募集の趣旨文には「2005年は、広島・長崎の被爆60周年であるだけではなく、5月2日～27日にはニューヨーク国連本部において核不拡散条約（NPT）再検討会議が開かれます。また、その直前の4月26日～28日には、メキシコシティのトラテロルコで史上初の4非核地帯条約加盟国会議が開催されます。PNNDは、4月27日に非核地帯をテーマにメキシコシティで行事を計画しています」と情勢を述べ、「この機会に、わが被爆国日本においても、核兵器廃絶へ議員が果たすべき役割を改めて認識し、積極的な取り組みをしてゆくことが、極めて大切であると考えます」と募集の呼びかけを行っている。

総会で報告されたところによると、ネットワーク参加議員の数は、39人から68人（衆議院46人、参議院22人）に増加した。PNND日本が、2003年7月に発足したときには62人を数えていたのを上回る数の参加を得たことになる。党派別に見ると、自民14人（衆12、参2）、公明9人（衆3、参6）、民主37人（衆27、参10）、社民5人（衆4、参1）、共産1人（参）、無所属2人（参）である。会員増加の背景には、NPT再検討会議への社会的関心があると考えられる。

役員に関しては、会長：鈴木恒夫氏（衆、自民）、事務局長：河野太郎氏（衆、自民）の留任が決まり、幹事に関しても岡田克也氏（衆、民主）が中川正春氏（衆、民主）と交替した他は、継続することとなった。他の幹事6人は、赤松正雄（衆、公明）、土肥隆一（衆、民主）、東門美津子（衆、社民）、山本一太（参、自民）、高野博師（参、公明）、江田五月（参、民主）（敬称略）である。

総会に出席した議員の名前の把握は正確にはできていない。鈴木恒夫、河野太郎、土井たか子（衆、社民）、中川正春、丸谷佳織（公明・衆）、赤松正雄、金田誠一（民主・衆）、山本一太、江田五月（敬称略）の9人の他1～2名の参加があった。この他に、秘書が代理で参加した議員は13人あった。20人ほどの市民団体代表が傍聴した。

黒澤満（大阪大学、NPT再検討会議・日本政府代表団顧問）さんが、再検討会議の背景、経過、分析、課題について約30分、梅林宏道さんが国際ネットワークとしてのPNNDの現状と最近の活動、平和市長会議のビジョン2020などについて約10分報告した。

質疑応答の中では、外務省のNPT再検討会議への戦略の欠如と改革の可能性、CTBTを暫定発効させることの意義と可能性、議員の役割の重要性、などが話題となった。PNND日本がどのような課題に取り組むべきかという観点からの議論は行われなかった。Ⓜ

臭いの記憶

1945年8月10日早朝。

長崎市の北部一帯は、前日9日の、午前11時2分まで存在していた街並みを想像させることはとうてい不可能であった。

あらゆる木々はなぎ倒され、赤茶けた大地は根こそぎ掘り返され、えぐり取られていた。長崎三菱兵器製作所大橋工場、同茂里町工場、そして長崎三菱製鋼所の鉄骨はアメのようにへし曲がり、今にもスクラップ寸前の様相であった。まだくすぶりの残る道路上に放置された死者の多くは、虚空をつかんだ姿で焼けただれている。運搬用に重宝された荷馬車の残骸の傍で、腹部の膨れ上がった馬の死体も散見された。

僅かに残された石垣の陰やコンクリート壁の陰では、裸同然や血に染まったぼろ布をまとった負傷者の群れが、放心したように救助の手を待つ姿が見られた。年頃の娘の変わり果てた遺体をさすりつつ、意味不明の言葉をつぶやき続ける軍帽姿の父親。頭部に外傷を受けた若い男が、着せてもらったシャツを引き裂き、絶叫しながらのたうち回る姿もあった。

こうした荒涼たる光景は、当時カメラマンとして活躍した山端庸介氏、林重男氏、松本栄一氏らによる白黒写真、後に米兵によって撮られたセピア色のカラー写真によって、60年を経た現在でも人々の目に強烈な印象を与える。しかし、これらの生々しい記録写真によっても、なお伝え切れないものが一つある。それは臭いである。

早朝とはいえ、真夏の太陽はすでにジリジリと照りつけ始め、熱線によって焼け尽くされた大地の焦げ臭さ、早くも漂いはじめた死臭、それらが混じり合った熱気が五体を包むようにムッと押し寄せてくる。被爆者たちが異口同音に「水、水を・・・」と喘いだのも、あながち熱傷によるとばかり限っていなかったのはそのためであった。

だがこの臭いはまだ序章に過ぎなかった。

少し日数が経つにつれて新たな要素が加わってきた。北部の高台に設けられてあった市営の火葬場は、原爆によって壊滅し、その機能を失っていた。そのため以前に自宅があったと覚しい場所から掘り出された肉親の遺体や、散乱した身元不明の遺体は、やむなくそれぞれ適当な場所で人々の手によって火葬に付された。

夕方ともなると廃墟のあちこちで、チロチロと鬼火のような焔が見え、そこから上空に向って薄紫色の煙がゆるやかに立ち昇りはじめる。そして上空の熱気と残照の中で、これらの煙は薄雲のように溶け合い、やがて市全体を覆わんばかりにたなびいて行く。それとともに人々の嗅覚を襲ったのは、いくつもの私設ともいえる「火葬場」から漂ってくる死臭と、なお消えることのない焦げ臭さとが混じり合った独特の臭気であった。

「神州不滅」―　そう叩き込まれつづけていた市民の目にも、日本の敗戦はどう避けようもない事実であることは明白だった。被爆から辛うじて生き残った人々は、残照も消え、暗い夏の夜空に広がる煙と異臭を吸いながら、そこに自分たちの絶望的な未来の運命を重ね合わせていたに違いない。

あれから丁度60年。今では何事もなかったかのように平和を取りもどした街の一角に佇むとき、フッとあの忘れ得ない臭気が蘇ってくるのは、もはや年老いた身を襲う一瞬の幻覚に過ぎないのだろうか・・・・。

特別連載エッセー●1

被爆地の一角から

土山秀夫

（題字も）

つちやま　ひでお

1925年、長崎市生まれ。長崎で入市被爆。病理学、88年～92年長崎大学長。過去2回開かれた核兵器廃絶地球市民集会ナガサキの実行委員長。

10周年記念号に寄せられたメッセージ

（見出しは編集部）

広島・長崎・被爆者

50音順。敬称略。

◆秋葉忠利（広島市長）

核廃絶運動を設定し直した功績

『核兵器・核実験モニター』の創刊10周年おめでとう御座います。創刊以来のファンとして、この間、国際的に通用する仕事を続け国際的なリーダーシップを発揮して来られた関係者の皆さんの御努力に心から感謝すると共に敬意を表します。創刊当時、日本にも、きちんとしたデータを基に、合理的な提案のできるNGOそしてそのニュースレターが誕生したことを大変嬉しく思いました。ややもするとイデオロギー的な色合いの強かった核兵器廃絶運動を市民に開かれた政策的議論の場として設定し直した功績も大変大きいと思います。また、このモニターに、カレンダーも含めて何らかの形で取り上げて貰えることが、市民活動や政治活動にとっての大きな励みになったことも特筆されるべきだと思います。これからも、国際的な連携をさらに強め、私たちの共通の目的である核兵器の廃絶に向けて、中心的な仕事をして頂けるものと期待しています。

◆伊藤一長（長崎市長）

資料として活用されています

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年記念号の発刊にあたり、長崎市民を代表して心からお祝いを申し上げますとともに、貴団体の非核・平和の取り組みに心から敬意を表します。

60年前、1発の原子爆弾により、長崎のまちは瞬時に壊滅し、死者74,000人、負傷者75,000人の惨禍を被りました。被爆者の多くは、高齢に達した今もなお、原爆後障害や被爆体験のストレスによる健康障害に苦しみ続けています。私たちは、このような惨禍を二度と繰り返してはならないと決意し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を世界に訴え続けてきました。

「核兵器・核実験モニター」は1995年の第5回NPT再検討会議を契機に創刊され、長年にわたり、核兵器廃絶・平和運動の貴重な資料として活用されています。去る5月のNPT再検討会議では合意文書を採択できないなど、核兵器廃絶運動には逆風の中にあり、世界の核兵器の状況や各地における核廃絶の取り組みの正確な情報と理解は、今後、ますます重要となり「核兵器・核実験モニター」が果たす役割も大きくなっていくものと思います。

創刊10周年を契機に、「核兵器・核実験モニター」のいっそうの充実を願い、読者の方々をはじめ皆様のご活躍を祈念いたします。

◆緒方　毅（長崎平和研究所）

問題提起型シンクタンクが確立

2005年度のピースデポ総会は過去3、4年の総会の中で最高に充実した総会であった。それはピースデポのような、正確で信頼できかつ問題提起型のシンクタンクの存在の重要性が特に認識されてきたからではないかと考える。数年前、故鎌田所長からぜひピースデポのモニターになるように薦められ何もわからないまま会員となり、モニターに登録されてきたがこれまで何一つ貢献するような仕事をしてこなかった。たいへん後ろめたい気持ちである。ところが、2005年度の総会は、出席者も多く、発言も前向き且つ活発で、出席していて初めて「おもしろい」と感じさせられた。それは、提案された議案書の内容も充実しており、活動内容がより具体的になってきたからである。とくに、今回は今年4、5月NPT再検討会議がニューヨークで開催され、アメリカの横暴が危惧されていたからかもしれない。平和への危機感がより高まり、ピースデポの存在意義が益々でてきていたからである。

さて、ピースデポの存在意義について考えてみたい。第一に、あの朝日新聞でさえ、批判の矛先に疑問を抱かせる記事（依頼記事内容の書換え注文が多いらしい）が多くなり、すべてのマスコミ機関が右潮流のなかに浸り、そのなかで「中立」を標榜し、限りなく体制的になってきている。その

意味でピースデポのような、正確で信頼できる「資料の提供」が可能な機関の存在価値が高まっているということ。第二に、核・核兵器（原子力発電、劣化ウラン問題なども含めて）問題は市民生活から遠いテーマであるという国民認識に警鐘を鳴らす「一次資料」を提供できる唯一の存在であるということ。第三に、そうした資料提供にとどまらず、「北東アジア非核構想」に見られるような、世界平和への「広い視点での問題提起」が可能な機関であるということ。

このように、創立以来、「創刊号」の趣旨に述べられているような内容にとどまらない役割を十二分に果たす存在になってきている。ともかくも、創刊10周年までこぎつけた関係スタッフの方々のこれまでのご努力に敬意を表し、更なるご発展を祈念したい。

◆沢田昭二（被爆者、名古屋大学名誉教授）

私の重要な情報源の一つです

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年おめでとうございます。

ピースデポは私の反核運動の重要な情報源の1つです。5月に開かれた2005年NPTレビュー会議は、アメリカのブッシュ政権の核兵器に固執する基本姿勢のため、予想された通り、会議自身の成果はありませんでした。しかし、アメリカのブッシュ政権が2000年の核兵器廃絶の明確な約束を反古にし、CTBT（包括的核実験禁止条約）に加わらず「使いやすい」核兵器の開発・研究を進めていることが、核兵器不拡散のためにも最大の問題であることを浮き彫りにしました。さらに、新アジェンダ諸国や非同盟諸国などの政府の取組みと平和市長会議などの自治体の運動、NGOや市民の運動など、様々なレベルの核兵器廃絶をめざす取組みの協力・協同もいっそう強力になり大きく前進しました。広島・長崎60年の今年を出発点にして、核兵器廃絶の新たなうねりをつくり出す展望も生まれています。こうした情勢の中で、ピースデポが情報を発信し続ける意義はますます貴重で重要になると期待しています。

◆田中熙巳（日本被団協）

被爆者運動の支えになりました

「核兵器・核実験モニター」が発刊されてからもう10年になるのですね。時には合併号の発行もありましたが、月2回の定期発行を10年間一貫して継続されたことに、梅林さんはじめスタッフのみなさんの並々ならぬご努力に感謝と敬意を表したいと思います。

私が一被爆者として、また、日本被団協

少年

ここから広島の郊外、夏草の茂る練兵場
午前八時十五分
少年はこんなに朝早くから
昆虫でも探しにやってきたのだろうか
突然
一条の閃光が少年を貫いた
彼は一本の火柱となった
一瞬　炭素と化した少年は
焦土に大の字に横たわり
空洞の眼を大きく見開いて　天を睨んだ
空洞の口を大きく開いて　天に叫んだ
母と呼んだか　兄弟を　友を呼んだか
痛みの叫びか
一本の歯もない
一片の爪の白ささえない
からからに炭と焼かれた少年を
なおも天と地の炎熱が焦がしつづける

地に還るもの　天に昇るもの

その瞬間
鮮烈な閃光に土の粒子が総立ちした

そればかりではない
数えきれない生命が塵となって宙へ消え去った

一灯もない広島に夜ごと星が降る
降りそそぐ星たちは
あのとき飛散した土の粒子
瞬時に消えたもろもろの生命だ
あおく　あかく
光を放ち　声を発して
地へ還ろうとする　星
愛する人のもとへ
父の　母のもとへ
我が子のもとへ
生まれ育った大地へ

しかし　そのとき
降りしきる星の光に洗われながら
今夜もいくつかの魂が昇天して行く

◆橋爪　文

本誌10周年へのメッセージとして2篇の詩を贈って下さった。

はしづめ　ぶん
1931年広島生まれ、14歳で被爆。詩人。日本ペンクラブ、詩人クラブ所属。詩、随筆、歌曲・合唱曲の作詞。「少女14歳の原爆体験記」（高文研、ピースデポの本）。十年近く前から海外反核ひとり行脚を続けている。

という全国の被爆者の団体の役員として、核兵器の廃絶と被害に対する国の補償を実現するために、何ができるか、何が必要か、どうするかを考えるとき、豊かなデーターとさまざまな提案が盛られた「モニター」は私の大きな支えになりました。

被爆者運動に関わっていて、とかく日本の運動には、批判や反対の意思表示はあっても、対案や具体的な提言が少ないもどかしさを感じてきました。提言を行なうにはその結果についての責任があります。そのためには学習による理論的な武装が必要です。

「核兵器・核実験モニター」は核兵器を廃絶する運動にとっての重要な、時宜を得た、豊富な情報(データ)を提供してくれました。ますますの発展を願ってやみません。それにしても、民衆による、強大な、シンクタンクをつくり上げたいものですね。

2005年NPT再検討会議でできなかったことを、被爆60年の秋の総会で実現させるよう取り組みを強めて行きましょう。

◆平岡　敬(中国・地域づくり交流会会長、前広島市長)

最高水準の仕事をしてこられた

この10年間、ピースデポが反核・平和関係のNGOとしては、最高水準の仕事をしてこられたことに対し、心からの感謝の念と敬意を表します。

「核兵器・核実験モニター」は、核兵器廃絶をめざして運動する私たちにとって、いつも重要な指針となっただけではなく、その存在自体が、ともすればくじけそうになる私たちへの励ましでもありました。

とくに、米国の戦略と米軍基地の動きに関する詳細なウオッチは、日本の平和と安全のあり方を考えるうえで、きわめて貴重な資料でした。

今回のNPT再検討会議が何の成果もなく終わった以上、これからは国家間の核軍縮交渉を促進するためにも、民間団体の果たす役割が一層必要になってくるだろうと思われます。

その意味で、「核兵器・核実験モニター」がより多くの市民に読まれ、核兵器反対の運動がさらに活性化することを期待しています。

核兵器廃絶への道は、結局のところ、市民の手によって切り開くしかないからです。

◆森口　貢(「核兵器廃絶ナガサキ市民会議」事務局)

厳しい状況のなか重要な役割を

創刊10周年記念号に2000年NPT再検討会議で合意された「核兵器の全面廃絶の明確な約束」等の具体策が記されることを、多くの人達が期待していたことだったでしょう。それでも第7回の再検討会議が「成果ゼロ」とは考えていません。2000年合意がなされたのも、多くのNGOや、反核市民運動の地道な動きが政府や国際機関の動きを後押ししたことも一因でしょう。また、核実験モラトリアムは、未臨界実験やシュミレーション実験の形で、核保有国の一部は、明らかに背いているが、核分裂を伴う実験を抑制している。しかしながら,核保有国は5カ国から、インド・パキスタンの新たな保有、更に核保有の疑惑国の増加、米国のNPR等、現実の厳しい状況のなか、被爆国日本の反核市民運動の指針になる「核兵器・核実験モニター」は、今後もますます重要な役割を果たすものです。

◆森瀧春子(核兵器廃絶をめざすヒロシマの会・共同代表)

核廃絶のための道案内役として

核兵器廃絶の運動において理論的にリーダーシップを発揮してきたピースデポの活動は、現在のきわめて厳しい核状況にあってはますます期待されています。ヒロシマ・ナガサキが核戦争の犠牲になって以来、世界各地で今も「ヒバクシャ」が、ウラン鉱山、「劣化」ウラン弾などの被害によって増え続け、核兵器使用の敷居がかってなくいほど低くされ、先制攻撃における核使用などの危機が高まる中で、地球市民が、手を結び合い、力を一つにして核超大国アメリカのその核政策を現実的に如何に封じ込めてゆくか、日本政府にその責務を如何に果たさせるかの課題が突きつけられています。

核をめぐる問題は、核の入り口であるウラン採掘の問題、原発、核廃棄物の処理、核実験や原爆被爆原発事故などの被害者救援問題、核の出口である廃棄物を兵器利用した「劣化」ウラン弾の放射能被害、低線量被爆、体内被曝の問題、宇宙の核武装から強力地中貫通核など新たな核開発など無尽蔵といえる多くの問題が山済みです。

これまでの10年がそうであったように、これからの10年もピースデポには核廃絶運動の叡智であり続けていただきたいと思います。

国会議員・市長

50音順。敬称略。

◆金田誠一(衆議院議員、民主党)

ムルロアでの原点を想う

創刊10周年、おめでとうございます。創刊の1995年が第5回NPT再検討会議の年であり、フランスの核実験再開の年であったことを知り、感慨深いものがあります。と言うのも、私は93年初当選で、2年後の95年に新党さきがけの武村正義代表と共にタヒチで行なわれた核実験反対の国際集会に参加、引き続いてグリーン・ピースがチャーターしたヨットでムルロア環礁沖での海上抗議行動に参加したからです。

「マキアス」という小さなヨットにはヨーロッパやオーストラリアの国会議員が20人ほど乗船、片道3日半、到着した夜は台風に遭遇、フランス海軍の威嚇と、初めての体験の連続に人生観が変わった思いでした。あれが私の原点だったのかと、「モニター誌」の10周年と重ねて想い起こしております。何よりも信頼できる「モニター誌」ですが、10周年を機にいよいよの充実発展を期待いたします。

◆河野太郎（衆議院議員、自民党、核軍縮議員ネットワーク日本・事務局長）

「核」のありかたを問うたいまつ

我が日本は、唯一の被爆国として、あの広島と長崎の悲劇を世界に伝え続けなければなりません。そして、再び人類が核兵器を使うことがないように不断の努力をしなければなりません。

我々はもう一度、核軍縮に対する日本の努力を振り返らなければなりません。安全保障の議論のなかで我が国の核に対する戦略を、「アメリカの核の傘」の一言で片付けてしまって良いのでしょうか。CTBTを批准せず、カットオフ条約には前向きな姿勢をとらず、使用可能な小型核兵器の議論が時々出てくるようなアメリカに対して、同盟のパートナーとしてもっとはっきりモノを言う必要があるのではないでしょうか。

「高速増殖炉」を前提とした我が国の核燃料サイクル戦略も、「高速増殖炉」にめどが立たず、ほころび始めました。政策の失敗を失敗として認めようとしない姿勢は、国内外の不信を募らせるだけです。使途不明なプルトニウムをトンの単位で積み上げてしまっている再処理政策は、核不拡散からの視点も入れて再検討しなければなりません。

「核」のありかたをしっかりと議論していくことが何よりも必要なこの時代に、ピースデポの発信力に大いに期待したいと思います。次の十年を目指し、たいまつを掲げ続けて下さい。

◆斉藤つよし（衆議院議員、民主党）

これまで以上の活躍が必要な時代

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年を心からお慶び申し上げます。

創刊以来、貴誌は世界平和と核兵器廃絶に向けた市民レベルの運動を発展させるうえで多大な貢献をしてきました。

冷戦崩壊後、核兵器廃絶は人類にとって最優先の課題となっています。

核をめぐるさまざまな情報を収集し、的確に分析してそれを多くの市民に提供することは、核兵器廃絶へむけた広範な市民運動を組織するうえで不可欠の要素です。

貴誌がこんにちまでその役割を果たしてきたことは多くの市民が認めていますが、これまで以上の活躍が強く求められています。

創刊10周年を機に、貴誌が質量ともさらに充実し、日本と世界で核兵器廃絶運動の推進力となるよう期待します。

◆鈴木恒夫（衆議院議員、自民党。核軍縮議員ネットワーク日本・会長）

核軍縮への決意を新たに

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年を心よりお祝い申し上げます。またピースデポの日頃よりのご活動に心より敬意を表します。

創刊より10年の年月が経過したにもかかわらず、残念ながら世界各地にはまだまだ数多くの核兵器が存在し続けています。本年平成17年は、広島・長崎の被爆60周年の節目の年でもあり、核軍縮と核拡散の防止に向け決意を新たにしなければなりません。ピースデポのますますのご発展を心より祈念申し上げます。

◆照屋寛徳（衆議院議員、社民党）

沖縄の基地を継続して監視を

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年をお祝い申し上げます。号を重ねる度に「核兵器・核実験モニター」が世界の核兵器に関する情報や核兵器廃絶運動に関する情報を提供していることに敬意を表します。残念ながら人類は今日なお悪魔の兵器たる核の廃絶に至っておりません。反核運動は国を越えて人類の共通課題、最優先課題と考えております。「核兵器・核実験モニター」では、核の問題同様に米軍基地が集中する沖縄の基地の動きについても注目し、監視を続けるよう希望しております。戦後60年の節目の沖縄では、未だ「核抜き・本土並み返還」は実現されておりません。沖縄県民は基地あるが故の事件・事故の恐怖から解放されていないのです。核兵器を含め、基地からもたらされる恐怖からの解放は沖縄県民にとって切実な願いです。「核兵器・核実験モニター」が今後とも継続して核兵器に関する国際社会の動きを正確に伝えてくれることを願っております。

◆**土井たか子**（衆議院議員、社民党）

海外の研究所に匹敵する活動です

『核兵器・核実験モニター』が10周年を迎えると伺い、今日までのなみなみならぬご努力に敬意を表します。ピースデポの平和問題に関する系統的な情報・調査研究活動にはいつも頭が下がる思いがします。ピースデポの活動は、イギリスの王立国際問題研究所やスウェーデンのストックホルム国際平和研究所にも匹敵する、いやそれ以上の成果を生み出していると思います。

5月にニューヨークで開かれていた核拡散防止条約再検討会議は、事実上決裂したまま閉会という結果に終わり、残念ながら核兵器廃絶への道はいまだ遠しと言わざるを得ません。8月に被爆60年を迎える被爆国日本から、あらためてノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャの訴えを世界に伝えていかなければなりません。「生きている間に核兵器廃絶を実現させたい」という被爆者の願いは、広島や長崎にとどまらず、日本全体、人類共通のものだと思います。「核兵器使用は二度と犯してはならない過ち」という国際世論を形成するために、ピースデポが市民の手による、市民の活動に役立つ平和のためのシンクタンクとしてさらに一層歩みを進めていっていただければと思います。一日も早く核のない日が来ることに向けてともにがんばりましょう。

◆**伊波洋一**（宜野湾市長）

基地撤去運動の理論的支柱です

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年おめでとうございます。1995年9月にフランスが南太平洋のムルロア環礁で核実験を

実施する直前に創刊されて以来、これまでに核兵器廃絶運動や非核地帯運動に対して貴誌が果たしている役割は極めて大きいと思います。併せて沖縄や神奈川、横須賀などの在日米軍基地に関する情報と分析を適宜に提供してくれていることは、米軍基地の整理縮小・撤去運動に大きな理論的支えになっています。本市の普天間飛行場の返還に向けた取り組みに対しても適切な情報提供やアドバイスを戴いていることに感謝いたします。私も95年のタヒチで核実験反対運動に参加し、世界非核議員会議の模様を貴誌に報告させてもらいました。その後、沖縄県議会で基地問題を取り組んでいた時も、現在、宜野湾市で普天間基地の全面返還を取り組む際も「核兵器・核実験モニター」は、私にとって指針の一つです。今後ともピースデポの主要事業として継続し、フィリピン・台湾・日本・朝鮮半島・モンゴルまでの東アジア非核地帯の実現に向けて取り組んで戴くよう要望いたします。

◆**松崎秀樹**（浦安市長）

ネットワークの大きさに敬意

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年おめでとうございます。

貴誌が発行された1995年は、東西冷戦が終止符を打ち、冷戦後の核軍縮の気運が高まりましたが、その最中、中国とフランスの相次ぐ核実験再開のニュースに接し、本市も非核平和都市宣言を行っている立場から、市民の方々に対し、両国の核実験の中止を求める署名運動を実施し、フランスに3回、中国には5回の抗議文の送付を行った事を思い起こします。

本市と貴誌の関りは、スタッフの一人に本市市議会議員の津留佐和子氏が参加されていたことが大きかったと思います。この10年間にわたり、一貫して核兵器廃絶に向けて、様々な情報を伝えこられましたのも、梅林代表を初めとしたスタッフの皆様のネットワークの大きさを物語るものと考えております。

今年の第7回NPT再検討会議では、さしたる進展も見出せぬまま終了してしまい、核兵器廃絶への道はまた一歩遠のいた感がいたします。

今後も唯一の被爆国である日本から核兵器廃絶の声を上げていくためにも、貴誌のますますのご健闘をお祈りいたすものです。

憲法・国際政治・平和学

50音順。敬称略。

◆**浅田正彦**（京都大学教授）

主張が違っても参考になります

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年、おめでとうございます。数年前より、貴重な情報源として愛読させて頂いております。もちろん主張や考え方に異なるところもありますが、その分析は大変参考になりますし、色々な面で研究にも活用させて頂いています。2004年4月に、NPT再検討会議・準備委員会の場で梅林さんにお会いしたとき、各種の文書が情報源として大変役立っているが、そのソースを是非ともURLで注に示していただきたい旨をお願いしたところ、早速、その後の号からは、出典が多数明示されるようになり、大変喜んでいるところです。今後とも、核兵器問題に関する重要な最新情報発信源としての役割を益々拡充されることを期待しています。

◆**荒川　譲**（鹿児島大学名誉教授・鹿県憲法を守る会会長）

イアブック発行の継続を

核廃絶の動きは5年前より前進したといえるのか、2005年NPT再検討会議の結果には深い憤りを覚える。この間、米国は「劣化ウラン弾」使用による核汚染・核被害を拡大し、臨界前核実験を繰り返し、新型核兵器の開発をも公言してさえいる。しかし私たちは、どのような紆余曲折を経ようとも、核廃絶は可能であり、実現できると確信する。それなくして地球の未来はないのだから。まず、日本の核政策を変えさせたい。

95年のNPT無期限延長への憤激と再検討会議への希望が「核兵器・核実験モニター」誌創刊の契機であった。本誌は核廃絶運動を推進するために必要な高品質の情報を豊に提供し続け、97年にはNPO法人として組織を整備・拡充した。今後も平和創造のシンクタンクとして、市民のための情報発信基地として発展・飛躍することを心から願う。

今後の活動に期待することは、複雑・高度化し、量的にも膨張する情報を的確に選択して、分かりやすさにも配慮して、誌面造りを進めて欲しいこと。第2に従前の「年鑑」を再編・復活した「イヤーブック」発行を定期的に継続して欲しい。反核・平和の課題が広がり、闘いが長期化しているので、領域毎の情報の再確認と、経年変化の確認が必要となる場合があるからだ。ピースデポには負担かもしれぬが、充実の契機ともなろう。

ピースデポの発展と、「核兵器・核実験モニター」誌の充実を尚一層期待しつつ。

◆**安斎育郎**（立命館大学国際平和ミュージアム・館長）

今後も鮮度のいい高品質の情報を

創刊10周年、敬意と謝意を表しつつ、今後の発展に期待します。

核問題は依然として人類社会が克服すべき第一級の課題です。加藤周一氏はかつて、「核兵器はなくせる。なぜなら、それが必要だからだ」と言いましたが、人々が「核兵器をなくすことが必要だ」と感じるためには、人々が、核兵器をめぐる状況についての最新かつ正確な情報を共有し、核兵器廃絶の共同の意志をくりかえし、くりかえし踏み固めなければなりません。その意味で、「核兵器・核実験モニター」が創刊以来果たして来た役割、今後も果たすべき役割はきわめて大きく、この発行を持続し発展させることはたいへん重要な意味を有すると思います。講演・執筆活動や平和博物館での展示などに「核兵器・核実験モニター」情報を積極的に活用することが、編集者の努力に応える道と心得、そのためにいっそう努力したいと思います。

◆**岩島久夫**（国際政治軍事アナリスト）

核保有国の二重基準を非難する

「核国」と「非核国」の「核軍縮」意識の調和の上に成り立つべきものが、「ブッシュ・ドクトリン」によってNPT（核拡散防止条約）再検討会議が全く無意味に終わったことの中でも象徴されているように、最近の核のみならず「軍縮」に関わる世界の動きの後退は、米国を先頭にした核保有国の消極的怠惰な姿勢に責任があるといっても、決して過言ではないと思う。

NPTに代わる拡散防止構想（PSI）を提示しながら、自らの核戦力を強化するというブッシュ政権の利己的「二重基準」が、「核軍縮」の大きな障害になっていることは、言うをまたない。

UNIDIR（国連軍縮研究所、在ジュネーブ）機関誌『ディスアーマメント・フォーラム』でも米軍備管理協会機関誌『アームズ・コントロール・ツデー』でも、つとにこのことを指摘し、非難している。

原爆原体験をしている日本政府は、米国政府に対してもっと「核軍縮の徹底」を強く求めるべきだ。

◆**岡本三夫**（広島修道大学名誉教授・日本学術会議会員）

情報の民主化に比類ない貢献

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年は快挙であり、本当におめでとうございます。このミニコミ誌は核兵器廃絶を推進するための情報源として比類のない地位を築きました。「核兵器・核実験モニター」の特徴は、情報の①新鮮さ、②信憑性、③平和指向性、④整合性、⑤平易さ、⑥情報量の豊富さなどにあり、一般市民が核兵器についての知識を取得するための「シンクタンク」的な頼もしい不可欠の情報源です。かつてならばこのような情報は軍関係者、一部の政府高官、御用学者等が独占し、秘密情報でしたが、「核兵器・核実験モニター」はそのような独占的閉鎖性を打ち破り、情報の民主化を実現しました。類似の情報源としてはストックホルム国際平和研究所（SIPRI）の『軍備・軍縮年報』（英文）があり、情報の網羅性においては「核兵器・核実験モニター」を凌ぎますが、年報のため1年遅れの情報もあり、新鮮さにお

いては後者に分があります。いずれにせよ、このような情報の宝庫に日本語で接することができるようになったことは、大袈裟な言い方をすれば「革命的」なことであり、日本語の読める研究者、活動家、外交官、政治家、ジャーナリスト、教育者などは「核兵器・核実験モニター」を大いに活用し、「絶対悪の核兵器」（湯川秀樹博士）を頂点にいただく軍事体制を崩壊させ、真の世界平和を築くことに貢献できるよう努力しなければならないと思います。

◆金子熊夫（外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、元外交官）

北東アジア非核地帯の出番必ず来る

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年記念おめでとうございます。10年前のNPT再検討・延長会議では、我々の猛反対にもかかわらず、「無期限延長」が決定してしまいましたが、あれがやはり大きな分水嶺であったわけで、以後ブッシュ政権の登場、9・11事件等により核問題をめぐる国際状況は激変しました。今回のNPT再検討会議の結末がそれを如実に表わしています。今後、少なくとも3年半、ブッシュ政権が続く間は、状況の悪化は避けられません。今は辛抱のときです。「朝の来ない夜はない」ということを信じて、根気よく頑張ってください。北朝鮮問題について言えば、どう考えても我々の「北東アジア非核兵器地帯」構想以外に抜本的かつ永続的な解決策はありえません。いつか当該地域の政治環境が好転すれば、この構想は必ず出番が来ます。そのときのために、同構想の普段の改善（肉付け）とパブリシティ活動を鋭意続けて行って下さい。一層のご健闘とご発展をお祈りします。

◆黒澤　満（大阪大学大学院教授）

理性に訴える運動の先駆者

「核兵器・核実験モニター」が創刊10周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。継続は力でありますし、充実した内容をここまで継続されたことは高い評価に値するものと考えます。私も第1号からの読者であり、今でも全号を書斎の手の届くところに置き、しばしば参考にさせていただいております。

日本における本格的な核軍縮に関するNGOとして、またこれまでの感性に訴える運動から、理性に訴える運動の先駆者として、国際的にも通用する分析と紹介を行ってこられたことは、われわれ研究者にとっても意義深いことであり、講演やシンポジウムの場で、本誌を推薦させていただいております。

一点気になるのは、「核兵器・核実験モニター」でありながら、在日米軍などが広く取り上げられていますが、若干、看板に偽りがあるのかなと思います。要望としては、翻訳の紹介の場合、オリジナルのテキストのサイトを記していただければ、非常に有益だと考えます。

◆古関彰一（獨協大学教授）

奴隷制完全廃止の長い闘いを想う

「核兵器・核実験モニター」を創刊以来、10年の長きにわたり刊行され続けてこられたことに対し、心から敬意を表します。私は、安全保障には関心を持っておりますが、「核」問題はどうも理系の知的素養に欠けるためでしょうか、おろそかにしてきました。それだけにピースデポの皆さんが、志を持続されてこられたことに畏敬の念を禁じ得ません。

先日のNPT再検討会議は、核保有国の「二重の基準」を、いままでになくはっきりと国際社会にさらけ出したように思います。しかし、わが非核国日本も、「非核三原則」を国是として掲げつつ、米国の核の傘に入っているわけで、これもまた、「二重の基準」を採っていることになります。

核兵器を廃絶することは、人類に課せられた重い課題です。私は、この重い課題を自ら進んで担っている人々が、自らをAbolitionistと呼んでいることを知ったとき深い感銘を覚えました。奴隷制の完全廃止までのあの長く険しい道のりを妥協することなく歩み続けてきた人々のことを思ったのです。

いつの時代も正義の闘いとは、長く苦しい闘いなのですね。今後のご検討を祈っています。

◆小林直樹（憲法学・人間学専攻）

核廃絶は平和に生きる権利の前提

健康を損ねて5・6月は休んでいることが多く、メッセージが遅れました。とりあえず、一言だけ意見を述べて、この問題について見事に一貫した反核運動を続けてこられた梅林さんに深甚の敬意と賛同の意を表わす為のよすがにしたいと思います。

私は、「核」は、人間の業（ごう）が生んだ最悪の大量破壊兵器だと思います。その完全な廃棄は実に難しい大変な仕事ですが、それなしには、人類は眞の安全と「平和に生きる権利」を享受しえないでしょう。その完全廃棄には、おそらく世界的な全面軍縮が必要ですし、又、その達成には、全人類が一つの地球的連邦制を建設し、維持していくしか途はないと思います。「核軍縮」はその道程の一歩にすぎませんが、超大国などが大量独占する「核」を捨てさせるには、やはり宇宙船地球号の上に他の生物とも併せて、人類が“共生”する以外、未来はないという認識を拡げ、共有することが肝要でしょう。

「モニター」の活躍に、同感の拍手を送り、ご健闘を続けられることを祈念して止みません。

◆杉江栄一（中京大学名誉教授）

2000年合意は消えていない

NPT第7回再検討会議は惨憺たる結果に終わった。新アジェンダ連合には5年前の迫力がなく、非同盟・中立諸国の結束にも乱れが生じていたように思える。会議は手続問題に終始し実質的討議がなかった。

他方米国は責任能力の低い代表しか会議に派遣せず、会議をリードする力を発揮しなかった。サンダース米大使の演説は諸国のNPR批判に対する防戦、しかもあまり説得力のない議論を展開するだけであった。そして国際社会がこれまで積みあげてきた成果を無視するというブッシュ政権の姿勢ばかりが目立った。これはブッシュ政権が続く限り予測されたことではあった。

会議が文書を採択できなかったからといって、2000年の会議の約束が消えたわけではない。むしろ米政権の国際社会無視が何れは破綻するのを予測させるものといえよう。

私にとって「モニター」は非常に重要な情報源であり続けた。

◆豊下楢彦（関西学院大学法学部教授）

理想と現実主義アプローチに感嘆

私はピースデポに入会してなお1年ばかりという「新人」ですが、「モニター」創刊以来の記事を読ませて頂いて、その基本姿勢においては理想主義的なほどにラディカルであるにもかかわらず、アプローチの「現実主義」に感嘆致しました。なかでも、「北東アジア非核地帯構想」は、北朝鮮問題は言うまでもなく、日本と韓国、中国との関係が狭隘なナショナリズムの高まりで悪化していくという、北東アジアをめぐる今日の閉塞した状況において、文字通りの突破口を切り開く構想として、いよいよ「現実味」を帯びてきたと思われます。今後は構想のより一層の具体化とともに、何よりも構想のもつ政治的軍事的意味合いの重要性を内外にアピールしていくことが、緊急性をもった最も大きな課題と思われます。微弱ながら私も協力させて頂きたいと思っておりますが、何よりもピースデポの一層の発展を心より応援したいと存じます。

◆藤田明史（平和学、トランセンド（平和的手段による紛争転換）研究会）

想像力を一層かき立てる活動を

最近、日本人の原爆経験について書かれた文章をいくつか読みました。その中で深く印象に残ったのは大田洋子著『屍の街』です。広島での被爆後に避難先で書かれたこの作品には、「原子爆弾をわれわれの頭上に落したのは、アメリカであると同時に、日本の軍閥政治そのものによって落されたのだ」という認識が述べられています。彼女には1945年12月30日の朝日新聞にのった「海底のような光―原子爆弾の空襲に遭って」（『日本の原爆文学⑮』所収）というエッセーがあって、そこでは「広島市が一瞬の間にかき消え燃えただれて無に落ちた時から私は好戦的になった。かならずしも好きでなかった戦争を、六日のあの日から、どうしても続けなくてはならないと思った」と書かれています。とても正直な心の動きです。そして、ここから先に引用した『屍の街』での深い歴史認識に繋がっているように私には思えます。井伏鱒二の『黒い雨』も深い洞察に満ちています。これらの作品を読むことでわれわれはかなりの程度まで原爆被害を追体験することが可能です。もしそれができないのであれば、われわれには想像力が不足しているという他ありません。

われわれから想像力を奪っているものはいったい何か。ピースデポの活動が核兵器に対するわれわれの想像力を一層かき立てるものであってほしいと願わざるをえません。

◆藤田秀雄（立正大学名誉教授、「平和の文化」をきずく会代表）

必要で正しい情報の大切さを痛感

いま、つぎつぎと重要な問題が、世界各地で起っている。日本は岐路に立っている。このような時、わたしたちにもっとも大切なのは、必要で、正しい情報を得ることであろう。とくに、平和のための学習（教育）や行動のあり方と取り組んでいるわたしのような者には、痛切にその大切さを思う。日本の一般のマス・メディアは、かならずしも必要な情報を伝えていないだけに、ピースデポの意義は大きい。

◆藤原　修（東京経済大学助教授・平和学）

日本の市民運動の確かな源流

今年は、日本の平和運動の出発点を画した第1回の原水爆禁止世界大会からちょうど50年目に当たる。この間、日本の反核運動は、世界でもまれな草の根的広がりと持続性を示してきた。しかし、同時に、党派的分裂や年中行事化＝形骸化と、戦争体験への素朴な寄りかかりの間で、欧米に見られるような高度な専門性と政策提言能力を備えた自立的な市民運動組織の形成は遅れた。ピースデポは、そうした日本の平和運動の弱点の克服をめざして設立された。本誌創刊10周年の歴史的意義とは、そうした本格的な市民的平和運動が日本ではじめて形成された点にある。そして、その功績は、まず梅林宏道氏に帰せられるべきものであろう。

日本の平和運動で「市民運動」を掲げたものとして、「べ平連」が知られている。しかし、同じ頃に相模原の米軍戦車搬出阻止闘争に従事していた梅林氏は、べ平連の運動にも非市民的性格があることを見抜いていた。「言い出しっぺがやる」などのべ平連の個人主義的な運動原理は、「いつも颯爽としていて、しかし根無し草である」。梅林氏は、自立した個人による運動にとどまらず、いかに人に働きかけ、新しい連帯をつくりだしていくかということを重視した。梅林氏が調査・研究を重視するようになったのは、「ただの市民」が他の市民に、情緒的あるいは政治的なアピールを超えて、客観的なデータという、より同意を得やすい土俵で働きかける、連帯

の手段としてではなかったか。すなわち、ピースデポに至る道は、平和運動のあるべき姿とは何かという問いに対して、梅林氏が、自ら実践的に答えようとしたものではなかったか。こうした意味で、日本おける市民的平和運動は、べ平連よりも、梅林氏らの相模原戦車闘争から80年代の反トマホーク運動、90年代のピースデポという流れの中にこそ確かな水脈があると私は理解している。

しかし、記念すべき本誌10周年にもかかわらず、日本における市民的平和運動は、今後も、いばらの道だと思う。日本の政治文化には、「市民」に対する抜きがたい敵意がある。加えて、ヒロシマ・ナガサキなどの戦争体験も、もはや日本人を粛然とさせる効果を持たなくなってしまった。折り鶴は焼かれ、政府高官が日本核武装をうそぶいても政治問題化しない。しかし、だからこそ、日本ではじめて市民的平和運動の芽を吹いたピースデポの意義は大きい。平和運動はよく種火にたとえられる。それ自身では大きな火にはならないが、いざ火を燃やそうとするとき、重要な役割を果たす。ピースデポの地道な活動と蓄積は、いずれきっと広い世間で必要とされるときが来ると思う。その日のために、是非とも粘り腰で踏ん張って欲しい。

◆山根和代（高知大学非常勤講師）

英文ホームページの一層の充実を

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年、おめでとうございます。ホームページは三ヶ国語で編集され、海外の方も利用できるのは大変心強いです。

私は、時々スペインのハウメ一世大学平和学・開発学修士課程に集中講義に出かけます。以前キリギスタンの大学院生が私の授業を受講し、12歳の時ソ連の核実験を学校で見学に行ったという話に驚きました。危険性は全く知らされておらず、核兵器を持っているソ連がいかに偉大かを学んだそうです。ちょうどセミパラチンスクと中国の核実験場の中間に生まれたそうですが、核実験場の近くの博物館へ行くと、目が四つもある奇形児の実態を見て恐ろしくなり、すぐ博物館の外に出たそうです。またウクライナの大学院生は、チェルノブイリ原発事故の直後、施設の保護をしようとして現場に入って被爆し、しばらく歩けなかったそうです。日本の被爆者と同じような人々が、核実験場付近にいるのですが、それが世界できちんと報道されていないのは、恐ろしいことだと思います。

ピースデポのホームページをさらに充実させ（最新のニュースを英文でも入れ）、今後の御活躍に期待します。

◆吉田康彦（大阪経済法科大学教授・元IAEA広報部長）

軍縮問題に取り組む者の必読誌

「核兵器・核実験モニター」は、核問題、軍縮問題、国際関係を研究するわが国の学者、専門家、NGO活動家、ジャーナリスト必読のニューズレターであり、貴重な存在です。

畏友・梅林宏道氏の核兵器廃絶に賭ける情熱と行動力には、かねてから深甚なる敬意を表しており、氏の主張と解説には常々共感し、啓発されていますが、何と言っても本誌の希少価値はその資料性にあります。

私は近著『国連改革』（集英社新書）、『21世紀の平和学』（明石書店）などに、「世界の核弾頭の現状」を示す図表を引用し、転載させていただいているほか、大学の授業でも必要部分をコピーして学生に配布し、保存するよう勧めています。

何らの合意文書も出せず、決裂に終わった今年のNPT再検討会議は、テロ後遺症を引きずるブッシュ米政権のユニラテラリズム（単独行動主義）に主因がありますが、その米国もいずれは国際協調主義に戻ってくるものと期待しています。

核兵器廃絶は至難の業で、私たちの存命中に実現する可能性は低いと思われます。しかし理想を掲げて主張し続けること、決して諦めないことに私たちの運動の意味があります。それこそが生きていることの証しです。先導役としてのピースデポのスタッフに皆さんのご健闘を祈ります。

ジャーナリスト・編集者

50音順。敬称略。

◆岩垂　弘（平和・協同ジャーナリスト基金・代表運営委員）

健闘光る核問題唯一の情報誌

「核兵器・核実験モニター」が創刊10周年を迎えられるとのことで、お祝い申し上げます。創刊号以来の読者としては、もうそんなになるのか、との思いです。

核問題の情報専門誌という刊行物は他には例がありません。核問題、軍縮問題について関心が高いといえない日本にあって、貴誌が月2回の刊行を10年間も続けてこられたことはまことに稀有なことであり、それを支えてきたスタッフの皆様に心から敬意を表します。

貴誌の提供する情報や論評、提言が、市民が核問題に対する理解を深めるうえで、大きな役割を果たしてきたと確信します。マスメディアが、核問題・軍縮問題に関する報道に積極的でないので、貴誌の健闘が光ります。最近号でいえば、NPT再検討会議や米軍再編をめぐる記事がとても参考になりました。なによりも、速報性があって良かったと思います。

貴誌が、核軍縮の世論を高めるうえで、いっそう積極的な活動を展開されますよう期待します。

◆**大石芳野**（フォトジャーナリスト、「世界平和アピール七人委員会」委員）

今の時代、永く続けることが大切

「核兵器・核実験モニター」創刊10周年、おめでとうございます。ちょうど10年前、私は、ヒロシマの被爆者の写真集を出版しました。被爆者一人ひとりが抱えてきた何十年もの時間の重みを伝えたい、という思いからです。

被爆60年のいま、自分のことでなければ関係ない、と考える人が増えています。でも私は、人間として生まれたからには、人と人とが精神的に繋がっていくことが当たり前と思っています。被爆者たちは、たくさんの亡くなった人たちの声なき声を伝えようとしています。この苦しみをもう他の誰にも味わわせてはならない、その思いを、私たちは受け継いでいかなければなりません。

ほんの一握りの戦争をしたい人々が、世界のあちこちで戦争を起こしています。それだけに核兵器が使われる可能性が限りなく大きくなっています。

いまの時代、「活動を長く続けていくこと」はとても大切なことです。ピースデポの今後の発展に期待します。

◆**岡本　厚**（岩波書店『世界』編集長）

世界における対抗軸が見える

「核兵器・核実験モニター」が貴重なのは、他のメディアではほとんど掲載しない、あるいはきわめて圧縮した形でしか紹介しない安全保障にかかわる様々な資料を、詳細に紹介し、あるは分析していることである。

いま世界がどこに向かっているか、米国は何を考えNGOや反核市民運動はどこでどう対抗しようとしているか、新聞やテレビでは見えないことが見えてくる。

望むらくは、10年の蓄積を踏まえ、この10年の大きな流れと展望を、たとえば単行本のような形でまとめてくだされば、今後におおいに役立つと思う。

今後の活動に期待します。

◆**桐生広人**（フォトジャーナリスト）

日本のプルトニウム生産は拡散源

1995年5月、国連でNPTが自動延長されると核実験を自粛していた中国が実験を始め、6月にはフランスが実験再開を表明。そんな時期に御紙の発行が始まったのは大きな意味があったと思う。最近のNPT自動延長は、核兵器の廃止へといたる手段をますます少くさせ、今一度、有効な手段の探究が求められる。

ブラジルでは3基目の原発建設を巡り国論が2分されているという。批判派は、核廃棄物処分場の不足、破滅的な事故と放射能の漏出を招き、核技術の拡散はテロリストや独裁国家が核物質から核兵器や汚い爆弾、放射性兵器などをつくる危険を増大させるとしている。同様な懸念は、日本の核再処理、プルトニウム生産が核拡散の格好の口実になると世界中は見ていると、先のNPTの集まりでは世界のNGOや米国の科学者らが指摘した。再処理はガス状の放射能を出し、世界中の被曝リスクを増大させ「唯一の被爆国」が打撃を与える。世界と日本のズレは大きく、ヒバクシャの苦しみは理解され難くなるばかりだ。

◆**下谷内奈緒**（しもやち・なお）（元ジャパンタイムズ記者・防衛・安全保障担当）

市民的データソースとして貴重

創刊10周年、おめでとうございます。日本の安全保障専門家の多くが防衛庁や自衛隊のOBという状況のなかで、「核兵器・核実験モニター」は民間の立場から専門的なデータを発信し続ける貴重な存在だと認識しています。特に、米国の情報公開法を利用して得られた情報とその分析からは、日本の防衛政策と密接不可分である米国の考えをうかがい知ることができ、ミサイル防衛や在日米軍の再編といった日本の安全保障上の動きを捉える上で、大変、参考になりました。モニターに掲載される情報が、今後、より多くの人々に共有されることを願います。

◆**中馬清福**（信濃毎日新聞主筆）

誇るべき正確さ、先見性、公正性

情報があふれ、何が真実か見分けるのが難しい時代になった。とくに安全保障に関する情報は、それぞれが国益を背負ってのものだから、よほどの眼力がないと読みを誤る。とくに今の日本のように、すべてがアメリカというプリズムを通してなされる場合、情報は限りなく変質させられていく危険がある。

にもかかわらず、日本のメディアの多くは依然、日米両政府とその関連機関による情報と判断に最高の順位を与えている。だから、とても優秀で私も評価する若手の外交記者が「もう極東の範囲だなんてことにこだわる時代じゃありません」なんてことを平気で言うのだ。きみ、ピースデポの「核兵器・核実験モニター」を読んだことがあるかい。なんですか、それ。とにかく、読んでごらん、情報は多い方がいいのだよ。そう言って私はコピーを渡す。

正確さ。先見性。具体性。いずれもピースデポの誇るべき特徴だ。だが、私はそうしたこと以上に、それが持つ公正性に注目する。その特性は、梅林さんの著作「情報公開法でとらえた在日米軍」同じく「沖縄の米軍」以来、一貫している。安全保障について書くときはいつでも、「核兵器・核実験モニター」のバックナンバーをひっくり返す記者の一人として、改めて創刊10周年をお祝い申し上げる。 19ページにつづく

誌面で10年を振り返る

1995年7月15日～2005年7月15日

核をめぐる激動の10年を、その名の通り、さまざまな角度から「モニター」し続けた本誌。過去10年間の誌面を辿れば、私たちをとりまく時代の流れが見えてくる。

1

創刊号（95年7月15日）

包括的核実験禁止条約（CTBT）の締結に向けた交渉が続くなか、6月13日にフランスが核実験再開を発表。「核実験をなくすための核実験」と謳うフランス政府の主張に対し、本誌は具体的な反論を展開。また、95年のNPT再検討・延長会議の際にニューヨークに集結した世界各国のNGOによる、2000年までに核廃絶を求めるとした「アボリション2000」発足声明を掲載し、賛同を呼びかけた。

12・13

第12・13号（96年1月15日）

世界の非核地帯の現状を詳細なデータで示した図説が登場。

19

第19号（96年4月15日）

米情報公開法により、横須賀を母港とする米海軍インディペンデンスの核兵器部隊が解体されていた事実が明らかに。情報公開法を使った調査はピースデポの掲げる基本方針の一つとして継続されている。

25・26

第25・26号（96年8月1日）

核兵器の違法性に関する国際司法裁判所（ICJ）の「勧告的意見」を受け、その積極的側面を重視し、反核運動の有用な財産として活用しようと呼びかけた。

39

第39号（97年2月15日）

2000年までの核廃絶を目指して95年に発足した平和・軍縮NGOのネットワーク「アボリション2000」の活動を支援するとともに、関連情報を日本の市民に継続して提供。

第49・50号（97年8月1日）

この年に初めて登場し、その後毎年継続されている「図説・地球上の核弾頭全データ」は、他のメディアから引用されることも多い貴重なデータの一つ。

49・50

70

第70号（98年6月1日）

インド・パキスタンによる核実験の強行を受け、最新の情報と分析を提供。並行して、短期の「印パ・プロジェクト」が始動。

79・80

第79・80号（98年11月1日）

新アジェンダ連合（NAC）の発足（98年6月）を受け、国連第一委員会（軍縮）などにおけるNACの動向をフォローするとともに、それを支援する市民・NGOの国際的な動きを紹介。

100

第100号（99年10月1日）

日本政府の呼びかけにより、98年8月から99年7月にかけて4回の国際的専門家会議「核不拡散・核軍縮に関する東京フォーラム」が開催され、最終報告書が発表された。これに並行し、NGOは各地で市民集会を開催するなど、多様な活動を展開した。第100号「記念特集」として、この「東京フォーラム」に対する各国の専門家からのコメントを紹介。

105

第105号（99年12月15日）

NACや日本政府が提出した国連決議をめぐる動きを毎年継続してフォロー。決議のポイントを整理するとともに、決議の翻訳、国連第一委員会（軍縮）や国連総会での投票結果の一覧などを資料として掲載。

109・10

第109・10号（2000年3月1日）

在日米軍の実態調査プロジェクトの一環として、米空母の横須賀母港化をめぐる日米交渉の真相を機密解除された1970―73年の米国務省公文書を使って調査。その概要を「極秘電報が暴く　米空母母港史の真相　民は之を知らしむべからず」と題する連載記事で紹介。

116

第116号（2000年6月1日）

2000年NPT再検討会議の前後、数号にわたってNPT特集記事を紹介。この号では、保有核兵器の完全廃棄への「明確な約束」を含む全会一致の最終文書に至るまでの審議経過を詳しく解説。

125・6

第125・6号（2000年11月1日）

日本政府が国連総会第一委員会（軍縮）に新しい核軍縮決議「核兵器完全廃棄への道程」を提出したことを受け、本誌は、「核依存と核廃絶は両立する」という主張を展開する日本政府の矛盾点を浮き彫りに。

144・5

第144・5号（2001年8月15日）

2001年秋の国連総会に提出する決議において、CTBTを2003年までに発効させるという目標を日本政府が主張しない方針であることが外務省との対話で明らかに。本誌は「2003年発効期限」提案を堅持すべきとの主張を展開し、結果的に政府の決定を覆した世論の盛り上がりに貢献。

148

第148号（2001年10月1日）

9.11テロ事件を受け、本誌は法の支配による秩序維持と、武力による報復攻撃の否定を強く主張。米国内に加え、日本、在日米軍、世界の関連の動きをまとめた「米同時多発テロ年表」の掲載を開始。

158・9

第158・9号（2002年3月15日）

国会で有事法制に向けた動きが進むなか、この問題の論点整理のために、軍事評論家でピースデポ理事（当時）の前田哲男さんによる「有事法制・マエダ便」の連載が開始される。

161

第161号（2002年4月15日）

2000年再検討会議で合意された13項目の実際的措置を中心に、日本に関連の深い2項目を加えた「13+2」項目に対する日本政府の履行努力を評価する「核軍縮：日本の成績表」プロジェクトを紹介。

176

第176号（2002年12月1日）

本誌は、一貫して米英の対イラク軍事行動を「国際法違反」として厳しく批判した。この号では、イラクに対する極めて厳しい査察要求を含んだ国連安保理決議1441（11月8日）の採択を受け、これが米国の武力行使を容認するものではないことを論証。

180

第180号（2003年2月1日）

1月10日の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）によるNPT脱退宣言を受け、「北朝鮮の核問題」を特集。核をめぐる北朝鮮のこれまでの歴史的流れを概説し、北朝鮮に存在する主要な核関連施設を図示するなど基本的事実を整理するとともに、日本や米国が何をすべきかを論じた。

200

第200号（2003年12月15日）

200号を機に紙面を一新。核廃絶に向けた努力を継続するとともに、「軍事によらない安全保障体制」構築の立場から、東北アジア地域安全保障問題についての情報・調査・分析・提言を行っていく方針をいっそう明確にした。田巻一彦さんが編集責任者に加わり、情報ウィングが拡充される。

210・10

第209・10号（2004年5月15日）

日韓市民が協力して作成したモデル『東北アジア非核兵器地帯条約』案を付録として添付。東北アジア非核地帯の実現に向けた市民や専門家による討論の「たたき台」として活用されていくことを期待。

217

第217号（2004年9月1日）

本誌が継続してフォローしている重要テーマの一つが、米軍の世界的再編の動きである。この号では、8月13日の沖縄国際大学での米海兵隊ヘリ墜落事故を受け、米軍再編の流れの中でいかに沖縄基地問題を解決していくべきかの視点を整理した。219号からは「米軍再編を巡る主な動き」と題する年表を継続して掲載。

234・5

第234・5号（2005年6月1日）

2005年NPT再検討会議に向け、主要な論点を整理するとともに、国際的なNGO・市民の動きを紹介するなど、核廃絶に向けた日本の市民の動きを生み出すための情報面でのサポート努力を継続。会議終了後は、再検討会議の結果に関する分析やNGOの活動報告を掲載し、今後の運動の発展に向けた諸課題を明確にした。

オピニオン・リーダー

50音順。敬称略。

◆**新崎盛暉**（沖縄大学教授）

安保再定義後の沖縄と重ねる

10年というのは、長いような短いような。私たちも小さな季刊誌『けーし風』の47号を出すところですが、しみじみとそう感じます。そして時代は、わたしたちの予想を越えてますます悪くなっていきつつあります。そんな中で可能性の芽らしきものを探し出し、その意義付けを行ない、それを育てていく努力をするというのが、わたしたちの仕事でしょうか。

沖縄もあれから10年。安保再定義にともなう有事体制の整備が進みつつある中で、その一環である在沖米軍基地の再編強化をくい止める民衆の闘いは続いています。そして個の志の集合体が生み出した非暴力実力闘争ともいうべきその闘いは、きわめて危機的な状況の中で、一定の成果を得ようとしています。しかしそれは、世界的な米軍再編の中における日米同盟の飛躍的強化とも連動しています。

そうした状況変化を理解するうえで、『核兵器・核実験モニター』は、折に触れ、参考にさせていただいています。今後とも、その役割を充実発展させられんことを期待します。

◆**宇井　純**（沖縄大学名誉教授）

定点観測と発信を持続して下さい

60年安保のあとの挫折感の中での公害反対運動で感じたあせりと無力感は、今といくらか通ずるものがありました。しかしその間にも公害はどんどん激化し、70年の政治的爆発に向かって進行していることを、当時私は見抜けなくて、後手にまわったことを悔やんだものです。持続的な努力という考え方はまだそのころはなかったのでした。

70年からの自主講座活動では、その反省はある程度生かされ、実行委員会は85年まで活動を展開し、機関誌や記録の発行をつづけた。その定常的な発行を持続させるエネルギーは、ボランティア集団である自主講座公害原論実行委員会にとっては、大変な大きさだった。しかし、その定常的努力によって、我々は環境庁などよりも公害抑止の効果を上げた集団であるとふりかえって自負している。その体験から、10年間月2回の通信を出しつづけ、定点観測と発信をする仕事の重要さと苦労はよくわかる。持続と積み上げに期待する。

◆**小川和久**（軍事アナリスト）

別ルートの登山者も評価のエール

『核兵器・核実験モニター』の創刊10周年、この間のご努力に心より敬意を表します（政府関係者も高く評価しています）とともに、『核兵器・核実験モニター』がいまだ不要とならない現状を憂慮しております。

専門家の一員として、違う斜面から山を登る格好になっておりますが、目指す「平和」という頂きは同じです。今後とも宜しくお願い申し上げます。

◆**國弘正雄**（元参議院議員、英国エジンバラ大学特任客員教授）

庸人ブッシュに史上最大の権能

合衆国の大統領の権能は、史上三人の独裁者の全てを合わせたよりも大きい、と言われつづけてきた。シーザー、ジンギス汗、ナポレオンというのだから豪儀なものだ。ましてや今日のあの国の国家元首兼政府首脳ときたら、恐らく他に比肩する存在とてなかろう。

その大統領がブッシュという、古今稀にみる庸人というのだから、ことはおだやかではない。かつて彼を教えたことのある現ニューヨーク市立大学院の霍見芳浩教授の説によると、歴代の43人の大統領のうち、ブッシュは疑いもなく最低の折り紙を付けられるという。

もっともこれには反論（?）もあり、憲法九条の会のメンバーで、同志社大学で哲学を講じたこともある、これまた超合衆国通たる鶴見俊輔教授は、29代目で2年しかその職になかったハーディングが43番目だ、とおっしゃる。いうならブービー賞争いの両者なのだ。

でも当時の合衆国といまのそれとは比べものにならない巨大な存在だ。しかもこっちは2期目を迎えている。

われわれただの1票も持たぬ非合衆国人は、「代表権なき破滅」を黙って待つしかないのか、ましてやわれらが首相は、あの庸人大統領に、「どこまでも付いて行きます下駄の」雪ならぬ泥ときているから、なおのこと仕末が悪い。

貴誌のご健闘を念ずるや切、と申し上げておこう。

◆**清水澄子**（元参議院委員、平和フォーラム副代表）

スタッフ全員の努力に感謝

今年は被爆、戦後60周年に当たります。その歴史的節目に「核兵器・核実験モニター」が創刊10周年を迎えられたことに心から敬意を表します。ともすれば反核・平和運動も、政治的スローガンに終始しがちですが、ピースデポの情報のお陰で、核兵器を生産し所有する国の動きや、その戦略についての分析、さらにはそれへの対抗軸としての理論的、政策的な問題提起がなされ、大変運動に役立っております。改めてスタッフのみなさんの努力に感謝したいと思います。とくに「第7回NPT再検討会議」に向けた情報提供のとりくみには、会議のプロセスに参加しているような緊張を覚えました。

また「東北アジア非核地帯」の行動提起は、私たち日本の反核、平和運動の緊急かつ直接的な課題と受けとめております。内外の政治状況は楽観を許しませんが、今後ともピースデポによって日本の反核運動がエンパワーメントされ、国際政治にアクセスし、世界から核兵器を廃絶する水路が拓かれることを期待しております。

◆関千枝子（女性ニュース）

NGOの闘い方に新工夫が必要

第7回NPT再検討会議は残念な結果になりました。国際情勢から予想されていたことではありましたが。

しかし、この会議までの取り組みをみて、核・平和問題のNGOがこの会議の重要性を本当にわかっているのか、と疑うくらいでした。

ほとんどマスコミにものらないし、普通のひとはNPT再検討会議のあることも知らない。会議への関心を高めるのは「署名」などで盛り上げていくしかないと思いますが、ごく一部の団体でやっているだけで、当然やるべき団体がとりくまない。被爆60周年ばかりがいわれている。しかし、核廃絶は国連の枠組みでやるしかないのです。あまりのことに私は自分で集会をしてもらったり、小さな団体がしている署名にとりくんだりしましたが、会議のことも、前回の会議の「明確な約束」も、ほとんど誰も知らない！

日本の核廃絶の運動が、本気で核廃絶を考えているのかと思いました。会議が始まってからは、マスコミもかなり書きましたが、どの程度の人が関心を持ち読んだか疑問です。

これから、貴誌の役割はますます高くなりますが、NGOの闘い方をもっと考えなければならないと思います。具体的には国際政治への関心を高め関与し、国の外交への批判を高めることです。

私の生きているうちに核兵器を廃絶したい。これは被爆者である私の悲願です。

◆竹村泰子（元参議院議員）

10年のNPTの進展に空しさ

10周年、おめでとうございます。
創刊号のコピーを拝見しながら、時代の流れをあれこれ思いました。

中国とフランスの核実験再開に対し、不安と抗議に世論が騒がしかったあの時に創刊されたのですね。

そういえば当時参議院議員だった私も、中国とフランス政府に対して抗議の手紙を送ったり、武村正義氏や鳩山由紀夫氏等数名の国会議員達とともに、フランスの実験場であるタヒチ島で行われた国際抗議デモに参加したのでした。

ハイビスカスやブーゲンビリアの咲き乱れる中、靴ずれの痛かった私は裸足でタヒチの熱い土を踏みながら歩きました。

あれから10年。NPT再検討会議は進展したのか。「MONITOR」の最新号を見ても空しさのみがひろがります。5年間、専門家でもない私もお仲間に入れて頂いて評価委員を務め、得難い学びを致しました。「ピースデポ」が目指し、真摯に取り組んで来た核実験停止や核兵器廃絶の思いが、早く核保有国を含む全ての国のものとなりますように―。

◆槌田　劭（使い捨て時代を考える会代表）

物的繁栄の永続を幻想するな

文明はその限界に直面している。資源と環境の両面において、又、農と食糧において。急速に肥大した文明、成長しつづけることで矛盾を「解消」してきた文明が、その限界に激突する状況を深めている。高速であればあるほどその激突の生み出す混乱と悲劇は大きくなる。争いが争いを呼び、力が力によって悲惨を増殖する危険を思う。

科学技術の進歩によってもたらされた物質力の大きさが悲惨の上に悲惨を重ねる。社会的混乱と国際的緊張とが争いを増幅させ、その争いの火種を物質力が爆発へと導く。そして核戦争への破局に至ることを恐れる。

物的繁栄の永続を幻想することをやめねばならない。近隣諸国との友好を大切にしなければならない。弱者・貧者の人権が尊重させる世をと切望する。しかし、近年の政治はどうだろうか。「自由主義」の暴走も、首相靖国参拝も理性を欠いている。

平穏を願って、「共生共貧」をと思う。争いの回避こそ、すべてに優先せねばなるまい。

◆原不二子（（財）尾崎行雄記念財団常務理事）

充実の継続を思い心から敬意

核兵器・核実験モニター10周年おめでとうございます。

236号では、「普天間基地の米本土移転

は可能である」という包括的な提案をはじめ、「報告：2005年NPT再検討会議を振り返る」、関連した新アジェンダ連合を代表してのニュージーランド大使の演説、米大使の演説などの翻訳文を掲載した充実した内容のモニターを読み、とても勉強になりました。これを毎月2回発行されるご苦労を思い、心から敬意を表します。

モニターの副題として「軍事力によらない安全保障体制の構築をめざして」と掲げられていますが、その具体的な構想を、毎号字体を変えるかインクの色を変えて掲載されたらいかがでしょう。軍縮・核兵器廃絶の究極の目的がはっきり見えることが大事だと思います。また、軍事力によらない安全保障体制の構築と日本憲法の9条は不可分の関係にあると思いますので、この二点は日本の人類に対する義務として追及されたらいかがでしょう。ご健闘を祈念します。

◆湯川スミ（世界連邦運動名誉会長、日本・世界連邦運動協会名誉会長）

地球を破滅から救う努力が必要

ピースデポにおかれましては、今回創刊10周年記念号を発刊されます由、殊にお芽出度く、心より御祝詞を申し上げます。

現在は、ものすごく威力の大きな核兵器が出現していますから、こんなものでやりあったら地球は破滅です。長年にわたりこの地球上に住居してきました人類にとって、こんな悲しい事はありません。何とか今のうちに地球上に核兵器を無くす努力をしなければなりません。

核兵器を一日も早く廃絶するには、どんな方法があるかを、多くの方々に考えてもらおうとピースデポは、月2回の定期発行をして来られました。

日本は憲法9条を世界中にひろげましょうと申します。

みんなして、今後もピースデポが盛大に活躍される事をお祈り致しましょうね。

◆湯川れい子（音楽評論・作詞）

ただ一つ、持つ国が捨てること

人間は必要の無いものは作りません。

ということは、核兵器も、「使用する」ということを前提として、せっせと作ったり、実験したりしている訳です。

本当に、バッカじゃなかろうか……と思います。こんなに作ってしまって、誰かが使ったら、人間は滅びるだけなのに。

本当はみんな、自分がやられるのが怖いから、その恐怖心から強力な武器を作るのだけれど、そして自分はしこたまかかえ込んで、相手には持つな、作るな、と言うのだけれど、こんな勝手な言いぶんはありません。

本当の勇気と安全はただひとつ。すでに持っている国が、捨てることです。持っていない国は、自分も作るというのでは無く、捨てて下さいと大きな声で言うことです。

まして日本は、すでに一度、恐ろしい目に会っているのだから、誰よりも大きな声で、持っている人たちに言いましょう。「手遅れにならないうちに、捨てて下さい！！」と。

科学者

50音順。敬称略。

◆猪野修治（湘南科学史懇話会代表）

科学者運動の歴史として注目

私は現在、神奈川県湘南藤沢で市民的学問所「湘南科学史懇話会」を主宰している。私が学問拠点とするこの市民的学問所を立ちあげたそもそもの背景は梅林宏道氏の長きにわたる活動を抜きに語れない。拙著『科学を開く　思想を創る－湘南科学史懇話会への道』（つげ書房新社、2003年7月7日）で詳しく論じたから参照してほしいと思うが、ともかく、物理学専攻の私のこれまでの人生は、市民運動家の梅林さんの「生き方」と何がしかの共有を図りたいという一念からだと言って過言ではない。梅林さんは、科学者の立場から激しいベトナム反戦運動を展開した。この科学者の運動はその範疇をおおきく飛び越えて、神奈川民衆運動、日韓連帯運動等々・・の人民の闘いに発展していく。そして現在のPCDS（太平洋軍備撤連動）、ピースデポの準備と、この「核兵器・核実験モニター」の刊行と続いているが、こうした一連の科学者の誠実な闘いの歴史と同時代に生きていることを私は誇りに思う。科学史家のはしくれとして市民運動家「梅林宏道論」を書くことがせめてもの罪滅ぼしと思っているがいまだ実現してはいない。数年前にそのことを申し上げたら、「私はまだ現役だ」とお叱りを受けたことがある。核兵器をめぐる混沌とした世界的な政治状況を見ると、彼の役割は終わることはない。本誌の購読者で本気でそれをやってくれる人が登場することを切望している。20世紀後半から21世紀前半における日本の誠実な科学者運動の典型を梅林さんの活動が体現していると思う。「核兵

器・核実験モニター」発刊10周年を簡単に祝うことはしまい。人間は神ではないから完全ではない。だからこそ、紆余曲折した弁証法的らせん運動である彼の科学者運動はきわめて人間くさい仕業なのである。それにしても彼の運動に共鳴し闘いを共有する人々には、正直に言って頭がさがる。梅林さんは幸せものである。

◆小出昭一郎（東京大学・山梨大学名誉教授、物理学）

日本は核兵器の真の姿を知らせよ

自分の国は自分達で護るのが当然だ、本能的に人は自衛するからである。しかし、闘って敵がいなくなる場合は話は簡単だが、勝利は次の敵を生むことが多いと歴史は教えてくれる。他国民を怒らせたり、辱しめたり、経済損失を与えるからである。自国の国益だけを考えて愛国のつもりで敵を作ったり増やしたりして、それに怯えたり戦争を始める。これくらい愚かしいことはないだろうが、世界中がそれをやっているようにみえる。いま愛国心くらい危険な思想は無いと言ったら言い過ぎだろうか。

大国が敵でも日本には神の助けがあるから守りきれる、などという独善的な神がかりの信仰は、化石になったはずで論外だ。そうすると、そもそも軍備に《これで安全が保障される》という限度などあるはずがない。軍縮は当然であり、国連もその主旨でつくられた。だが銃砲社会米国では「武器で身を守るのは男として当然」と考える人が多数派で誠に困るのである。大統領とその取り巻きの発想はそうとしか考えられない。これを軍需産業の利権と結びつけたら短絡的だろうか。

大国ばかり見ていると、どの国も軍隊をもつのは当たり前と思ってしまうが、これは思い込みにすぎないと思う。世界の大多数の国の軍備は、米国のそれに比べ無きに等しい零細なものであろう。自国より少しでも弱い国が忽ち征服できるなら、世界は弱肉強食の場となってしまうだろうが、そんな直接的植民地帝国主義は過去のものとなった。強国の鎧袖一触が効いたのは封建領主の雇い兵が相手の頃までではないのだろうか。それなのに日本のように米国の鼻息をうかがっている情けない国はない。

核兵器の恐ろしさを日本人はかなり知っているが、世界の大部分の人は無知である。原水爆投下はホロコーストに匹敵する大量殺戮で、終戦を早めたことくらいで免罪されるものではない。この無知につけ込んで強行される核実験、劣化ウランは放射性物質であることを知らないかの如き勝手な使用など、大国の目に余る横暴に世界の心ある人々の怒りは積もって来ている。自然科学の成果をこのように利用されているのも我々には忍びがたい。貧困の克服や自然環境の改善など人類の英知を注ぐべきことは山積しているのに、超大国の指導者が前世紀のカウボーイのようなことを言い、それに追随するしか能のない政治家と官僚に振り回されるだけではあまりにも情けない。日本はもっと原爆の被爆体験を基にして核兵器の眞の姿を世界に宣伝し、軍備などやめたときにもたらされる人の心の尊厳さを訴える資格と責任をもった国として、国連に頼まれて常任理事国に推挙されるようにならぬものだろうか。

国際的に平和に貢献すべく目覚しい活動を続け、今回機関誌の10周年を迎えられた梅林宏道氏に心から声援を送ります。

◆佐々木　健（物理研究OB）

政府に論争を挑み回答を引き出せ

創刊10周年おめでとうございます。しかしいま、私の心は沈んでいます。第7回NPT再検討会議は何ら成果をあげることなく、大国のエゴによって潰されてしまいました。2月19日（土）の日本青年館中ホールで行なわれたNPT市民集会の熱気は冷水を浴びせられてしまいました。私達も「2020年までに」とか言って、甘い甘い見通しのもとに、平和愛好勢力に呼びかけるばかりで、すこしはしゃぎ過ぎだったのではないか、と思っています。核廃絶は10年や20年の運動では達成できるわけがありません。私達は戦略を変えなければなりません。100年いや1000年の長い見通しのなかでの戦争の無意味さ、十分に可能性のある人類絶滅の危機、他国が核を放棄するまで自国の核を放棄しない政策の愚かさ、を訴えて行かなければならないと思います。特に、核保有国の政府や自国の政府に、常に怠らずに、様々に視点を変えながら核武装に関して、あるいはその現状維持の姿勢に対して論争を挑み、とことん公の返答を引き出し続けなければなりません。（核）戦争になれば、国民を守るという国家の国民に対する約束は現実には無意味になることを、先ずは、彼らに法的に文言で認めさせなければなりません。

逆に、私達は彼等から厳しく問われるかもわかりません、「核を放棄すれば、核による脅しや攻撃を受けるリスクが増えるではないか。」このような反論に対しては、私自身は「そのリスクは絶無とは言えません。しかし平和な世界を築くためには、そのようなリスクは甘受しなければなりません」と答えようと思っています。それがわが心に誓った平和憲法の精神です。アメリカの核の傘の中に入ってぬくぬくと、他国を脅し続けるよりは、余程ましではないですか。万が一それによってわが身が滅ぶことになっても、私は少なくとも他人を殺さなかったという満足を抱いて、死ぬことが出来ます。しかしこの捨身の論理を自分以外に敷衍することはできません。もっと強固な理論の構築が必要です。皆様、考えてください、教えて下さい！

もう一つ、核を持たない国だけで、非核国際連合をを創る案はどうですか?。皆様のご意見を知りたいです。

◆白鳥紀一（物理学者）

われわれ皆が問われる核の現状

活動開始十周年に際して、梅林さんと「ピースデポ」にあらためて敬意を表しま

す。核廃絶に向けた一貫した原則的な活動は、かけがえのないものです。しかし残念ながら、今年のNPT再検討会議を5年前と比べるまでもなく、現在が「十周年のお祝い」を申し上げるには遠い状況にある事は認めざるを得ません。

1956年にアルフレッド・ベスターが書いた「虎よ、虎よ！」というSFがあります。話を端折って核兵器に関する所だけに絞れば、この小説には破壊しようという思念で爆発する「パイア」という核物質が登場して、主人公のガリー・フォイルは、それを独占しようとする人たちを出し抜いて、世界中にばらまいてしまいます。「パイアだぞ！この物質に諸君が何であるかを語らせるがいい」と叫びながら。

ガリー・フォイルは、核独占の対極である核廃絶の基本的な原則を提示したもの、と私は思っています。この原則からの後退をどう取り返すか、われわれ皆が問われています。

◆菅沼純一（科学技術ジャーナリスト）

明日に向かう風を感じさせた功績

創刊以来10年、とは誠に迅いものです。この間、『モニター』は日本の核軍縮運動に、NGOという新しい観点から、かつてと異なった運動のスタイルを切り拓いてきました。この種の運動はいつも持久戦に追い込まれ、時間が経つほど不利になる。それは向こう側は給料を支給され、こちら側は秤量責めにあうといった構図が変わらないからです。『モニター』は、この受けて立たざるを得ない構図の中で10年という年月、一刻一刻、着実に倦むことなく歩み続け、当初の水準を持続どころか、上昇させることに成功しました。『モニター』は、私たちが期待していることを、十分に成し遂げてきました。では逆に、『モニター』が私たちに期待していることを、私たちはどれほど成し遂げただろうか？この非対称性を鮮明にし、明日に向って吹く風を絶えず私たちに感じさせ続けてきたこと、それこそ『モニター』の功績だと思います。

◆鈴木達治郎（ピースプレッジ・ジャパン代表）

科学技術の役割や評価も論じて

創刊10周年おめでとうございます。核軍縮・不拡散問題で、日本で唯一の情報機関誌として、大変貴重な役割を果たしてこられたことに対し、まず心より敬意を表したいと思います。10年間で、いろんなことがありましたが、9・11以降、事態は深刻化を増しています。特に、日本の国内における「核」問題へのタブー意識がなくなりつつあること、間違った認識やうわさの域をでないような情報に基づく議論がはびこっていることなど、貴誌の重要性はますます高まっていると思います。憲法改正論議や教科書・靖国問題など、日本の国内における動きも大変心配です。今後への提案としては、難しいとは思いますが、安全保障問題における科学技術の役割や評価なども、積極的に扱っていただければと思います。今後の更なる発展をお祈りしております。

◆豊島耕一（佐賀大学理工学部物理科学科）

原発との関連問題の記事をもっと

創刊1年後ぐらいから会員として本誌を購読している。今年2月に惜しくも亡くなった大庭里美さんの記事がきっかけとなって、イギリスの核廃絶運動トライデント・プラウシェアズ（TP）の支援活動を始めることになった。その記事とは、アンジー・ゼルターさんがTPの創設以前に行った非暴力直接行動と、それへの無罪判決に関するものだった。

また、数年前から大学の授業科目として、原発や核問題も含む内容のものを担当しているが、そこで毎年必ず資料として配布するのが、同誌に毎年掲載される「地球上の核弾頭全データ」と、隔年掲載の図説「世界の非核兵器地帯」である。

このように本誌はこの6年来の私の生き方に強く影響し、また核問題についての不可欠の知識の源となっている。

記事内容について一言注文すれば、原発との関連問題がほとんど取り上げられないのは残念である。例えば、六ヶ所事業所問題にしても、233号で梅林氏がエルバラダイ発言に関連して触れているだけのようである。イランや朝鮮にはアメリカが「反原発」の要求をしていることからも分かるように、核兵器と原発とが隣り合わせの技術であることは周知のことである。

スタイルについては、表題のすぐあとに著者名がなく、末尾に小さく書かれているので、個々のarticleの素性が一見して分からない。特に、一つの文章がページを跨いで連続せず、飛んでいる場合などはなおさらである。新聞と言うより論説集という性格が強いので、はじめに著者名を書くのがいいと思う。

◆服部　学（立教大学名誉教授）

NPT再検討会議の分析に期待

5月にニューヨークでNPT（核拡散防止条約）再検討会議が開かれたが、ほとんど何もできなかったようである。新アジェンダ

連合の諸国等が現実にどんな態度をとったか、見てきた方に教えていただきたい。

この条約は1968年7月に結ばれたが、第9条で「1967年1月1日前に核兵器を製造しかつ爆発させた国」を「核兵器国」と規定している。もちろん核兵器を持つ国が増えるのは望ましくないが、現在はインド・パキスタン等核兵器を持つ国が続々と増加し、新型核兵器の開発も進められようとしている。そして第6条では各締約国は「核軍備競争の早期の停止」について「誠実に交渉を行うことを約束する」と述べているのだが、核兵器国がほとんど何もしてこなかったのも事実である。

実は伏見康治先生を中心とした核拡散問題研究会（現在は核軍縮研究会）は小さな集まりなのだが、95年3月にこの条約の無期限延長に反対して「核兵器不拡散条約の延長についての意見」なる小さなパンフレットを出している。残念だが私の眼の黒い間に核兵器廃絶は実現しそうにもない。「核兵器・核実験モニター」はますます重要な意味を持つものになってきそうである。

◆藤田祐幸（慶応義塾大学、物理学）

20周年の前に悲願成就を願う

ピースデポ10周年、おめでとうございます。梅林さんとスタッフの皆さん、そして、これを支えてきた多くの皆さんの、ご尽力の賜物です。しかし前途は多難であります。10年前のNPT再検討会議のころには、希望の光が、ほのかではあれ、見えていたように思いますが、ここ数年、状況の見通しはかつてないほど悪くなってきました。今こそ国家の枠組みを越えて、地球市民の声を束ね、核廃絶の悲願を達成することが必要でしょう。

隔週で届けられる「核兵器・核実験モニター」は、貴重な一次資料を、リアルタイムで、しかも日本語で読むことができる点で、私にとって第一級の情報源になっており、折に触れてプリントして学生に配り、教材に使わせていただいてもおります。

このような時代であるからこそ、ピースデポが存在し、なおかつ存在し続けることの意義は絶大なものであると思います。しかし、20周年を迎える前に悲願を成就し、その存在の必要がなくなることを、願うものであります。

市民運動・NGO

50音順。敬称略。

◆赤石千衣子（ふぇみん婦人民主新聞編集部）

感謝、もっと宣伝して欲しい

平和と核廃絶への熱い思いと、冷静な事実の集積が核兵器・核実験モニターにはある。私は購読を始めてから6年くらいかと思うがつねに地球規模の視点が、客観的な資料として提供されるので大変ありがたく思っている。

こうした資料が生きることは周辺事態法の審議のときもFAXニュースを発行していただき、その資料が野党の国会質問に役立っていたことをロビイしながら実感した（その後野党の質問力が弱まってきたと感じる）。私たちに必要なのは、平和を求める人々の広がりと、そして平和についての資料の集積の両方なのだろう。私も力不足だが、核兵器・核実験モニターは後者の方向をきちんと指し示していると思う。

9・11以降の世界の状況に私はまだ追いついていない。NPT再検討会議がこんなふうになると誰が5年前に思っていただろう。なぜ?ということが多すぎる。それでも今を正確にとらえていく努力はしていかなければならない。

モニターはデザインが文字の多さに比してすっきりしているし、非常に工夫されているといつも感じていることも付け加えておく。編集に携わるみなさんの努力に感謝だ。今後は宣伝力をもっと増してもらいたい。

◆川端国世（日本YWCA幹事）

日本の好戦的雰囲気を止めたい

インドのウラン発掘現場と米軍が使用した劣化ウラン弾によるイラクの放射能汚染現場に行ったことがある。その甚大な被害に苦しむ人々に出会い、大きな痛みを覚えると共に、放射能汚染が地球規模で広がっていることを実感している。そして2005年NPT再検討会議は合意文章に到らず、核拡散の危惧が広がっている。また、日本政府も北東アジアでの政治緊張をあおり、米軍再編の動きに有事の可能性を見て大変な危険を感じている。

しかし、日本全体が思考停止状況に落ちいっており、好戦的というべき雰囲気の広がりがある。この流れを何とか変えたいと思う。マスメディアが機能しない今、各国市民が連帯して平和を構築するために共有できる資料は欠かせない。北東アジアの平和と安定の担い手は市民であるという自覚と核兵器廃絶を進める根底となる人道的思想、広島と長崎の被爆者の方たちに頼りすぎてきた平和運動から脱皮した新たな運動への展望も見出したい。「核兵器・核実験モニター」の内容に信頼を高く置いている私は、今後への期待も更に大きく持っている。

◆呉東正彦（原子力空母の横須賀母港問題を考える市民の会・共同代表）

原子力空母の母港化阻止に支援を

『核兵器・核実験モニター』創刊10周

年、おめでとうございます。タイムリーかつ実証的な数々の記事に、毎号注目しています。また梅林さん、スタッフのみなさんのご苦労には毎号大変なものがあったと思います。横須賀の原子力空母母港ストップの運動は、日本にとって、核兵器の廃絶とともに重要なテーマですが、いよいよこれからが重要な局面を迎えます。もし横須賀で原子炉が事故を起こしたら、という恐るべき事態を防ぐために、これからも是非、この問題についても、リアリティーのある有用な情報を多数ご提供、ご支援頂くよう、宜しくお願い申し上げます。次の20周年には、核兵器の廃絶と、横須賀の原子力空母母港ストップの運動が勝利を収めていますよう、ともに頑張りましょう。

◆澤田美和子（有限会社トランズネット代表取締役／翻訳家）

行動しながらの発行に感嘆

核兵器・核軍縮モニター創刊10周年、おめでとうございます。核実験モニターを読み始めたのは、2000年12月15日発行の129号からでした。

スタッフのみなさんは、講演や活動の場などでお会いしても、活発に行動しておられる一方で、このように、月2回、定期的にモニターを発行してこられたことに感嘆し、敬意を表し、感謝します。

専門的なことがわかりやすく書かれていて、知りたいことがぎゅっと詰まったこのモニターは、私にとって、仕事のうえでも、活動のためにも必読のニュースです。

核兵器廃絶への道が一段と遠のいてしまったような今こそ、核兵器をめぐる情報を発信することが、重要になっていると思います。核兵器廃絶への強い意志をもって、これからも、モニターを応援していきたいと思っています。

◆杉山百合子（イラク派兵違憲訴訟原告）

頼りになる知識と知恵のより所

「個人の痛みはどんな武器でも同じなのに、なぜ、特別に核問題なのですか？」ずっと抱いていた質問を梅林さんに伺いました。「核軍縮：日本の成績表」評価のための会議で2003年に森瀧春子さんとともに藤沢に来られたときです。梅林さんは、その被害が莫大であることと、核兵器が権力の兵器である点を挙げられました。そして、お二人で丁寧に日本の核政策について説明下さいました。「権力の兵器」という言葉が、活動の裏付けを持って語られたことを感じました。ここ数年の大国といわれる国々の動きを見ると本当に、その力の使い方の間違いがひどくなっていることにますます危惧を感じます。

今年のNPT会議が不調に終わり、ああ今こそ、なのに！！と落胆しました。まさかここまでの結果になるとは。それでも、世界中でピースデポのような地道な活動が、監視が続けられていることに励まされます。中途半端に資料のつまみ食いで発言しそうになるとき、ピースデポの存在は頼りになります。文字通り、市民の平和資料と知識と智恵の活用組織として、これからもよろしくお願いします。

◆鈴木克治（世界宗教者平和会議日本委員会・渉外部長）

正しい認識と世論形成に貢献

「核兵器・核実験モニター」の創刊されて10周年をお迎えになられ永年の平和構築への貢献に対しまして敬意を表しますと共に衷心よりお慶びを申し上げます。

さて、5月に国連で開催された核拡散防止条約再検討会議は核兵器の廃絶と不拡散を願う世界の市民社会による必死の取り組みにも拘わらず最終文書を採択することなく終ってしまいました。9・11以降の国際情勢の流れがこのような結果を生み出してしまったのかと、今さらながら世界的に広範な市民社会の声が糾合され、意思決定システムに如何に反映させていくことができるのか、その重要さがつくづくと感じさせられ、着実にして効果的な世論の形成がいよいよ緊急の課題となってまいりました。

私ども諸宗教間の対話と協力を通して世界の平和への貢献を志す運動としてWCRP（世界宗教者平和会議）も世界の軍縮と安全保障を目指す立場から来年2006年8月には国立京都国際会館を会場に世界各地域各国から諸宗教代表者約500名の参加を得て、今日国際社会が直面する平和への課題に取組む予定です。

私どもは常々、「核兵器・核実験モニター」から貴重な情報を頂き、活動を進めておりますが、ピースデポが地道な情報収集、日本政府・国連機関との対話また提言活動を継続され、その成果を「核兵器・核実験モニター」を通し毎月発表され、多くの方々の軍縮・安全保障問題への正しい認識と世論形成に貢献しておられることの意義はますます大きなものとなることと確信しております。

今後の益々のご発展をご祈念申し上げる次第です。

◆高橋紀代子（はだの・平和都市宣言につどう会）

海外からの視点をこれからも

私が当時の平和資料協同組合に入会したきっかけは、98年8月の「市民の声：今こそ核兵器廃絶を」緊急行動会議への出席でした。

長くベトナム戦争に、日米安保に、核兵器に反対の意見表示をしてきた私としても、袋小路を覚えていました。そこへ印・パの核実験が行われた時期です。全ては私の不勉強であったのですが、杉江栄一先生が著書のプロローグにお書きになっているように、「日本の被爆・原爆」と現在の核兵器への認識に隔たりがあったと言えます。核兵器の配備、軍縮交渉、核廃絶への道筋など、具体的な把握が不足していたと思います。

そんな中、8／29の集会で、海外からの

視点や外務省の担当者の声を直接聞いたことは新鮮でした。その後のモニター誌上で、核廃絶への可能性と困難さを学ばせていただいています。国際貢献という言葉の真の内容を考えてゆかなければならない昨今、海外のNGOと連携して得られるこの会の情報に触発される人は私だけではないでしょう。

ピースデポの活動が終了することが、本来望まれるところではありますが、今後も、国際的な視点を浸透させる取り組みを続けていただきたいと思っています。

◆竹内宏一（「NPO戦争メモリアルセンター設立準備会」事務局担当理事）

反核平和 “情報と知”のセンター

長年の反核・平和運動―労組役員としての第一線の活動からは退き、今はNPO団体で活動していますが、それだけに信頼できる情報からは遠ざかっており、「核兵器・核実験モニター」は貴重な情報源です。特に、最近ではNPT再検討会議の動向を注視してきましたが、マスコミではほとんど報道されませんので、唯一「核兵器・核実験モニター」の記事が頼りでした。有難うございます。

こういう状況だからこそ、「NPOピースデポ」の更なる活動が、地球規模で、海外動向の把握やさまざまな反核団体、平和運動との連帯が、一層求められます。情報ネットワークを拡げ張り巡らし、その情報と知的素材を日本国内に伝えることの出来る唯一つの組織が「NPOピースデポ」だ、と思い期待もしています。

ところで、これからのことでは、日本国内での、マスコミでは伝えないような情報――例えば自衛隊の特殊部隊の動きとか、米軍再編の動きに対する自衛隊内部の動向とか――などを求めたいのですが、そう簡単ではありませんね！

それと、地方にいる我々に、どのような情報提供と何が協力できるのか、試行錯誤していますが。

◆西尾漠（原子力資料情報室）

私たちも負けずに がんばります

『核兵器・核実験モニター』創刊10周年に敬意を表します。核兵器廃絶への道はなお遠いかもしれませんが、確実な歩みを10年間伝えつづけていただいたことの意味は大きいと思います。「正確な情報を提供する」情報紙であると同時に読者の次の行動の指針となる本紙の役割には、今後さらに期待が高まります。私たちも負けずにがんばらなくっちゃ。

◆野間伸次（アムネスティ・インターナショナル会員）

権力側にとって 恐るるに足る紙面

貴誌の創刊10周年、誠におめでとうございます。関係者の方々のこれまでの献身的努力に深く敬意を表す次第です。

事実に基づく冷静な紙面づくりは派手さはないのですが、真に戦うべき相手に対する必須の手段となります。ともすると扇情的、扇動的なメディアの報道やサイバー上のアピールなどに、目を奪われがちになりますが、事実把握こそが市民にとっての強力な武器となります。事実把握が曖昧なアピールはたとえ情緒的に人々の気をひくことがあっても、権力側にとっては恐るるに足りません。

アムネスティも報告書の正確性で多くの人々の信頼を勝ち得てきました。最近、米国のラムズフェルド国防長官がグアンタナモでの人権侵害に関するアムネスティの報告書を非難しましたが、彼は一方、イラク戦争開始時、フセイン政権の人権侵害に関するアムネスティの報告を数回引用しています。約20年前にアムネスティが既にイラクでの人権侵害を訴えていた時に、彼はフセインを表敬訪問していたのですけれども。

ぶれない軸を持ち続けることの大切さを痛感します。

◆松井和夫（核戦争に反対する医師の会共同代表／ピースデポ和歌山ポスト）

核廃絶運動の 触媒的役割を果たす

私たち医師は「核兵器は健康の最大の敵」「放射線障害に対して有効な治療法がない。だから、予防すなわち核の廃絶しかない」という思いで核廃絶運動に取り組んでいます。また、核兵器関連に使われてきた莫大なお金が健康や教育のために使われていたらと思うと強い憤りを感じます。

よく「それぞれの立場で可能な運動をすればよい」と言われます。もちろん、運動は科学的な知識や信頼できる政治的・軍事的情報、世界のNGOの動向やそれらの冷静な分析や判断に基づくことが望ましいのですが、私たちが独自に情報収集や分析を広範にやるのは困難。「核兵器・核実験モニター」のお陰で、これらの情報が容易に入手できることにいつも感謝しています。「モニター」は核廃絶運動の触媒的役割を果たしていると思います。

一日も早く「お役目ご苦労さんでした」と廃刊になることを望みますが、しばらくは貴重な情報の持続的な提供をお願いします。

◆安田和也（第五福竜丸平和協会）

事実を掴み 真実に迫るピースデポ

アメリカの水爆実験により死の灰を浴びて被曝したマグロ漁船第五福竜丸は、いま江東区夢の島公園の展示館にある。被災当時、アメリカは被害の全容を隠そうと

した。新たな核戦争のための材料とされた面もあり、いまも事件は不明な点が多い。ピースデポが手掛ける核・軍事問題のいずれもがビキニ事件とも底通するものがあると思う。貴会の粘り強いとりくみは、隠された、あるいは見えにくくされたデータを掴み出し、本質を解析して、人々が知り考え、判断すべきことを提示する。それは今を生きる市民にとってまさに今日的な問題提起だ。第五福竜丸も今日の核問題を発信し航海を続けたいと願っている。

貴会の10年間の活動は、現代におけるNGO・NPOの役割について、その評価と信頼を造成する役割も果たされた。ますますのご活躍・ご発展を期待します。

◆山中悦子（NPO法人・草の根援助運動・共同代表）

軍事費の愚かさを示す図説を活用

第7回NPT再検討会議の顛末をみながら私はあらためてこの時代NGOに課せられた役割がいかに大きいものかを再認識しました。人間の生命や環境といった何ものにもかえがたいはずのものが、各国の利害の前にはまるで石ころ同然。国連はその創設時から国連憲章第9章71条でNGOを認知し、国際社会の課題解決のためには国益に左右されず不変的な価値を優先させるNGOの力が必要だと考えてきました。残念ながらNGOはまだ世界を変えきれていませんが、小さな成果の積み重ねがいつか結果を出すのです。「核兵器・核実験モニター」にはこれからもがんばってほしいと願わずにはいられません。開発協力NGOで活動する私は、第130・131号（2001.1）に掲載された「軍事費でこんなことが出来る　世界が必要としているもの」（作成：世界ゲーム研究所）を活用しています。途上国の人々が生存のために必要なお金の数倍も軍事費に使っている国家の愚かさを多くの人に知ってもらうことができる資料です。

仲間たち

50音順。敬称略。

◆有地淑羽（ピースデポ京都ポスト）

これからは縦の広がりにも挑戦を

私が梅林さんと出逢ったのは私の好奇心のおかげです。95年に国際司法裁判所で核兵器を裁く「世界法廷運動」に私は京都生協から代表派遣されました。私は環境が原点なので日本の反核運動などは最初の頃はよくわからくて、とにかくいろんな所に入り込んでは核の話を聞いて勉強していました。平和行進で東京夢の島の出発集会に参加した夕方、コープ神奈川の交流会に紛れ込んだ時、廊下に出てふと見ると「核廃絶○○・・・」という文字。どんな人達なのだろうと好奇心からドアをあけました。どんな話だったかは覚えていませんが、京都からやってきた異邦人を歓迎してくださり、後でビールをご馳走になり、名刺をいくつかもらい夜行バスで帰りました。それが初めての出会いでした。

私はいろんな所で聞いた核廃絶の話を「がらがらぽん」というニュースにつくり、もらった名刺のFAXに送りつけました。B5の手書きの誤字だらけのニュースを受け取るとみんなびっくりしたそうです。でもそこには他の団体の情報が載っていて面白かったようです。そして「核実験・核廃絶モニター」が届きました。こともあろうに私はモニターの面白いと思った情報を切り抜き、「がらがらぽん」のニュースに貼り付けあちこちにFAXしたのです。梅林さんの正確で重要なニュースがあちこちの反核のオフィスに流れたのは私の無茶な一助があったのです。日本の反核運動に情報と資料で横のつながりを広げていったピースデポの役割は貴重なものでした。そして世界的なNGOに成長した今からは、縦の広がり（市民に届くこと）もますます重要になってくるかな?と思っています。

◆池田佳代（NPO法人OurPlanet-TV事務局長）

平和を創ってゆく必要を伝えたい

こどもの頃は毎年夏になると、原爆被害の写真パネルが街角で展示されていた。その衝撃的な写真を見るのはとてもつらかったのだが、それを見ずに素通りしてはいけないような気がして、きちんと見ようとしたものだった。この経験は、原爆の破壊力のもの凄さや戦争の悲惨さ、非情さを実感させ、戦争について伝えるテレビや映画、書籍などの情報とあいまって、私に「再び同じことがおこってほしくない」という思いを刻み込んだのだった。

今回のNPT再検討会議は成果のない非常に残念な結果となった。多くの人々が望んでいるはずの「核兵器廃絶」という意志が国際社会の場で反映されなかったという現実は、民主主義の寡占時代ではなかったのかと物悲しく感じる一方で、自分はどれだけのことをしてきたのかと問い返した。「平和」を空気のごとくあたりまえに感じている人たちに、平和を維持すること、創っていくことへ関心を向けさせる必要を感じている。

社会情勢が不安定化しつつある今、ピースデポの役割はよりいっそう増していくと考えられる。今後も　「核兵器・核実験モニター」による情報発信を大いに期待している。情報を受け取る側の私たちは、与えられたものを一から十まで追いかけることは困難だとしても、せめて何がおきているのかを大局的にとらえる努力はかかせない。そのためのニュースソースとして、よ

り多くの人に「モニター」が読まれることを望んでいる。

◆**大澤一枝**（ピースデポ監査）

小さな一つの力が大きな力を作る

私が「反核」に関わるきっかけは、73年、生活クラブ生協（みどり生協）に加入後、83年、生活環境の破壊等、自分達をとりまく社会の有様に異議申し立ての必要をひしひしと感じていたころ、沖縄に続いて国内2番目に基地の多い神奈川県に非核県宣言運動の気運が高まり、組織的な署名活動を先導的に行ったことに始まります。核というものを日常生活と結びつけて考える習慣がなかった子育て中の母親達にとって、悲惨な広島、長崎の被爆地や基地問題は無関心ではいられないことと思い知ったのでした。ピースデポ（平和資料協同組合）には小さな力ながら創立より関わっております。

世界初の被爆国にとって日々めまぐるしい変動の中で、正確な情報の発信基地としての役割は重要であり、継続こそが未来への責務です。一人でも多くの人々で次世代へ繋いで行く英知を出し合いましょう。小さな「ひとつの力」が結び合って「大きな力」が生まれるをモットーに自分なりの役目を続けたいと思います。

◆**大滝正明**（ピースデポ・ボランティア）

露仏伊など翻訳で貢献を続けたい

研究・情報誌『核兵器・核実験モニター』創刊10周年、誠におめでとうございます。小生は、2002年10月にピースデポに入会し、翌年の4月以降、この栄えある『核兵器・核実験モニター』誌に、「枯れ木も山の賑わい」を肝に銘じて拙稿を寄せてまいりました。一次資料を原語からの翻訳で紹介するという『モニター』誌独自の編集方針に少しでも寄与すべく、乏しい語学力に鞭打って、仏語原語からのシラク大統領の仏核政策ドクトリンの紹介、ロシア国防軍機関紙『赤い星』に露語で抜粋掲載されたプーチン大統領のミサイル開発構想の紹介、あるいは2020ビジョン実現に向けての独・草の根反核運動のリーフレット抄訳などを行わせて頂きました。今後とも、貴誌の末永い、さらなる発展に、当方も微力ながら協力して参りたい所存です。伊軍人で戦略爆撃理論を唱えたジュリオ・ドゥーエ（1930年没）の主著を原語である伊語から訳出し、ピースデポのウェブサイトで公開させて頂ければ、などというたいそうな「願望」を抱きつつ、貴誌の発展を祈ってやみません。

◆**高木規行**（「ディフェンス・レビュー・フォーラム」マネジャー）

核兵器は何処からみても役立たず

10年前の7月、私はインドで仕事をしていました。10時と3時のティータイムには現地のオペレーター達と話ながら尋ねた。「あなたの知る日本の地名はどこ?」インドの人達は何故か広島・長崎だけは知っていた。その理由はAtomic Bombが使われた為だからと彼等は言う。彼らの理解する核兵器とは「でかい爆弾」でしかない。しかし、私達は彼等を笑うことは出来ない。なぜなら、日本にも同じ程度の認識しか持たない者が、この10年の間に増殖しているからだ。曰く、北が核武装するなら我が国も核武装すべきだと。

笑う事は簡単だ。核兵器の構造は簡単だが、製造するにも維持管理するのも人的にも環境的にも経済的にも失う物が多く、しかも決定的なのは兵器なのに軍事的判断だけでは使えない。兵器としての価値は完全に地に落ちている。この事が世界中どころが、日本でも理解されていない。核兵器はどの側面から見ても役に立たない事を、次の10年でどれだけ伝えられるかが、これからの活動だと考えております。

◆**高名晶子**（ピースデポ諫早ポスト）

ピースデポよ、元気を出して

99年の初秋、長崎原爆資料館の研修室で、梅林宏道氏は「日本は核兵器廃絶を国の政治意志として明確に核保有国や国連に示さなければならない」と話されたと記憶している。

被爆地長崎から被爆者の苦しみを訴え、人類の未来に対する道義的責任として、核廃絶を世界に向って訴え続けているが、その声は世界にとどいていないのではないか。むしろ、日本政府は明確な国家の政治意志として核兵器廃絶を世界に示していないのではないかとの疑念を抱き、私はむなしさを感じていた。

梅林氏の明晰な論理の展開が、研究と思考の積重ねの上になされていることに新鮮な共感を覚え、講演後、勇気を出して氏に話しかけた。その後、モニターを送っていただき、他に見られない一次資料の内容にふれ、99年10月に入会した。その後、核兵器廃絶地球市民の会のプレ集会に、たくさんの荷物を背負って来埼し、設営から講演までこなす川崎哲氏を見て、私のできる範囲でピースデポの活動に協力しようと思った。

しかし、最近のピースデポは何となく元気がないように見受けられる。御多忙のことと推察するが、梅林代表に今こそ元気を出して、核兵器廃絶を日本の政治意志とするべく、中央でも地方でも明瞭に説いてもらいたい。代表の説得力ある論説が会員増加にもつながるのではなかろうか。

ピースデポから巣立った川崎哲氏は、今や平和運動に関する論壇の新鋭として活躍している。これもピースデポの10年の足跡の一つではなかろうか。

◆**水野希代子**（ピースデポ準備ボランティア）

核を止める活動は社会を問う活動

創刊号の「平和資料協同組合（準）」の「準」の文字をなつかしく思い出します。もっとも私が、「準」て何のことだろう、と最

初に思ったのは、「核兵器・核実験モニター」創刊の数年前、90〜91の湾岸危機、湾岸戦争の頃のことです。当時は、平和資料協同組合(準)は、「平和資料協同組合(準)ニュース」というニュースを発行していました。その後、「準」の文字がとれる頃位まで、事務所に足を運ぶなどして実作業に参加させていただきました。

91年当時、アメリカが再びイラクを攻撃する未来のことを想像などしませんでした。再度イラクで劣化ウラン弾が使用されたことは、核をめぐる世界の現状を象徴していると言えるでしょう。日本の中でも、国が戦争を行なうしくみ作りが着々と進捗しています。

こうしたことについて、マスコミは何も伝えません。市民の側から情報を発信し、共有していくための仕事が不可欠です。生活や社会の事柄の何に取り組むにしても、いちいちかなりの勉強をすることを余儀なくされ、その意味では大変な時代に生きていると思いますが、人が人らしく生きていく社会にするために本当に様々なことに取り組む市民の活動が根を張りめぐらせている社会であることも実感しています。マスコミがきちんと働かないからという消極的な理由からだけでなく、市民の側から社会のあり方を方向づけていくために、情報と視点の提供をつづけていく必要があると思います。核がなくならない状況は「不幸」ですが、核を止めるための活動は同時に、どういう社会や暮らしを作っていくかを考える作業でもあります。この「幸い」な仕事は、私達が生きていく限り、ずっと続きます。

◆薮　玲子(日韓ツイン・ブックレット共同刊行委員会委員)

伝えることには
エネルギーが要る

昨年から取り組んでいた日韓ツイン・ブックレット『東北アジア非核地帯』が3月末に完成した。それと同時にブックレットを売ることが私の仕事となった。どこに行くにもバッグに数冊のブックレットを忍ばせている。核廃絶に関心のある人は喜んで買ってくれた。仲の良い友人もすんなりと買ってくれた。ところが、その後、行き詰まってしまった。

ごく普通の市民たちとの雑談の中で、経済の話は出来ても、「核兵器」の話を切り出すのはむずかしい。「核兵器」と言った瞬間に場が白ける。「東北アジア非核地帯構想」について説明すると、「それは理想論で、現実にはまず不可能なことでしょうねえ・・・」と言う人が多い。じっくりと話し合う時間も体力もなくて、こちらの旗色の悪いまま、別れることも多い。

「不可能だ」と言い切る一般市民に、短い持ち時間内で「非核地帯は実現可能である」と伝える方法はないものだろうか?たとえば、こんなのはどうだろう?「ほとんどの人が実現不可能だと思っていたことが実現した」実例を2つ3つ挙げてみる。「ベルリンの壁がある日いっきに崩壊した」とか、「アメリカ大リーグで日本人選手が大活躍!」とか・・・。「なるほど。可能性はありますね」と言わせてみたい。何かよい実例があれば、ぜひ教えていただきたい。

「伝える」ことはエネルギーが要る。「伝え続ける」ことは並大抵の努力ではすまない。『核兵器・核実験モニター』が10年続いたことに、あらためて敬意を表します。

◆山口　響(大学院生、ピースデポ・ボランティア)

スタッフの
超人的活動に想う

私自身、もっぱら事務所でのボランティアとしてピースデポに関わり始めてから約6年になる。強く思うことは、事務局のスタッフの働きがなければ、ピースデポは一日たりとて動かないということだ。そのことはもっと評価されるべきだろう。ピースデポの生み出す成果物の質量は、彼女たち(事務局は基本的に女性が多い)が処理できる限界をとうに超えており、私たち会員の一人一人が、企画段階から実際の任務遂行にいたるまで、いかに創造的なかかわりができるかが問われている。

もうひとつ考えることは、「梅林後」の体制をどうするかということだ。「早く世代交代をしろ」というおしなべたつまらない要求をしようというのではない。ピースデポの活動ノウハウのかなりの部分は、梅林さんの強いリーダーシップの下に作り出されてきたとみて間違いはない。問題は、その重要な資産を共有化することにまで手が回っていないということである。しかしこの課題は、彼自身に要求するものというより、むしろ私たちのほうから積極的に解決するように動くべき性格のものなのだろう。

イアブック「核軍縮・平和2005
―市民と自治体のために―」

8月6日発売！

お待たせしました。今年もピースデポが総力を挙げて贈るデータブック（年鑑）が完成しました。今年のイアブックは書店でも購入できます。

63のキーワードで一年間の動向をわかりやすく解説しています。また、30点の第一次資料を掲載。総ページ380ページ。すべての資料に原典のURLがあります。ぜひお求めください。

「今」を読み解き、「未来」を考えるための資料満載！！

監修：梅林宏道

●特別記事：
米軍再編と在日米軍
速報　2005年NPT再検討会議
9条を変えるな
韓国人被爆者の証言　など

●核軍縮・平和を読み解く
63のキーワード：
北朝鮮の核兵器／国民保護計画と自治体／イラクの自衛隊　など

会員価格：1500円
一般価格：1800円（ともに送料別）

★ご注文はピースデポまで。

日　誌

2005.6.21～7.5

作成：中村桂子、林公則

DOD＝米国防総省／DOE＝米エネルギー省／MD＝ミサイル防衛／NSG＝原子力供給国グループ／NYT＝ニューヨーク・タイムズ／WMD＝大量破壊兵器

●6月21日　第15回南北閣僚級会談（～24日）。23日、朝鮮半島非核化を最終目標とし、平和解決への実質的措置を取るとした合意文書を発表。

●6月22日　イラン原子力庁、ロシアの協力で南部ペルシャ湾岸ブシェールに建設中の原発の内部を外国報道陣に公開。

●6月23日　サマワの陸上自衛隊の車列付近で爆発。イラク軍サマワ地区司令官のカリム大佐、「自衛隊が（宿営地外で）初めて標的となった」。

●6月23日　北海道電力泊原発などの定期検査等に関する機密扱いの情報がインターネット上に大量に流出していたことが判明。

●6月23日　NSG年次総会がオスロで開幕。24日、濃縮・再処理関連の規制強化策で合意できないまま閉幕。

●6月23日　7月のサミットに向けて、G8の外相会合がロンドンで開催。北朝鮮に6か国協議への即時復帰などを求める議長総括を発表。

●6月23日　DOD、台湾に米レイセオン社製の早期警戒・探査レーダーを提供すると公表。

●6月24日　イラン次期大統領に保守強硬派のアハマディネジャド・テヘラン市長が選出される。

●6月27日　経産省原子力安全・保安院、総合エネルギー調査会原子力安全・保安部会に「もんじゅ安全性確認検討会」（仮称）を設置と決定。

●6月27日付　NYT、ブッシュ政権が80年代以降製造を中断していた原子力電池用プルトニウム238の生産再開計画を進めていると報道。

●6月28日　インドのムカジー国防相、ラムズフェルド米国防長官と会談し、兵器共同生産などを含む米印防衛関係の新たな枠組み文書に署名。

●6月28日　空自、MD導入に合わせて千葉県飯岡町で試験運用を進めている「将来警戒管制レーダー」（FPS―XX）を公開。

●6月28日付　ロシアのインタファクス通信、北朝鮮情報筋の話として、北朝鮮が7月後半の6か国協議開催に向け準備を進めていると報道。

●6月29日　ブッシュ大統領、WMD拡散に関与が疑われる北朝鮮等の企業等と取引した銀行・企業の在米資産を凍結する大統領令に署名。

●6月29日　北朝鮮の李根・外務省米州局副局長ら、6か国協議参加国の高官が出席する非公式協議がニューヨークで開催（～7月1日）。

●7月1日　米上院、下院が削除した新型核兵器研究経費を盛り込んだ形でDOE関連の06会計年度歳出法案を可決。

●7月1日　中ロ、8月に初の大規模合同軍事演習を中国の遼東半島周辺で実施することなどを定めた協定に調印。インタファクス通信。

●7月2日　韓国の鄭東泳統一相、6か国協議再開に向け、北朝鮮に対する提案を米国と共同でまとめることに合意と発表。

沖縄

●6月21日　20日深夜から翌早朝にかけ、激しい騒音を確認。70デシベル以上の騒音が65回。

●6月23日　水陸両用車沈没事故を受け、防衛施設局らが現場周辺を環境調査。

●6月23日　戦後60年の節目に来県した小泉純一郎首相が、在沖米軍基地や兵力の本土移転をめぐり、その困難さを強調。

●6月27日　キャンプ・ハンセン内レンジ4の都市型戦闘訓練施設の利用が初めて明らかに。金武町長が施設の使用中止を要請。

●6月28日　都市型戦闘訓練を容認する政府に対し、金武町議会が抗議決議。

●6月28日　連邦上院議会公聴会で、米基地見直し委員会が改めて普天間の嘉手納移転案などを勧告する宣誓書を提出。

●6月30日　嘉手納飛行場の大型機洗機場の移設が、日米合同委員会で正式合意。

●6月30日　嘉手納飛行場周辺の屋良地域で6月の深夜早朝の騒音回数が979回を記録。先月同時間帯の約三倍。

●6月30日　水陸両用車沈没事故の環境調査結果を防衛施設局が発表。魚介類への影響は松田沖では判断困難、辺野古沖では影響なし。

●7月2日　米海軍原子力潜水艦ヘレナが午後4時9分から同日午後4時23分までホワイトビーチに病人移送のため寄港。

●7月3日　強制わいせつの容疑で米軍嘉手納飛行場所属の空軍二等軍曹アルマンド・バルデス容疑者を、県警が逮捕。

●7月4日　米軍ヘリ墜落事故現場の沖縄国際大学の黒焦げの壁部分を切り離す作業に着手。

●7月5日　米兵強制わいせつ事件について、在沖米軍トップの四軍調整官が稲嶺恵一知事を訪ね、謝罪。

●7月5日　沖縄返還密約訴訟の第1回口頭弁論が東京地裁で開廷。

◆◆◆◆

ピースデポの会員になって下さい。

会費には、『モニター』の購読料が含まれています。会員には、会の情報を伝える『会報』が郵送されるほか、書籍購入、情報等の利用の際に優遇されます。『モニター』は、紙版（郵送）か電子版（メール配信）のどちらかを選択できます。料金体系は変わりません。詳しくは、ウェブサイトの入会案内のページをご覧ください。（会員種別、会費等については、お気軽にお問い合わせ下さい。）

ピースデポ電子メールアドレス：事務局＜office@peacedepot.org＞梅林宏道＜CXJ15621@nifty.ne.jp＞
田巻一彦＜tamaki@pw.catv.ne.jp＞中村桂子＜nakamura@peacedepot.org＞丸茂明美＜marumo@peacedepot.org＞

宛名ラベルメッセージについて

●会員番号（6桁）：会員の方に付いています。●「（定）」：会員以外の定期購読者の方。●「今号で誌代切れ、継続願います。」「誌代切れ、継続願います。」：入会または定期購読の更新をお願いします。●メッセージなし：贈呈いたしますが、入会を歓迎します。

核兵器核実験モニター
書：秦莞二郎

次の人たちがこの号の発行に参加・協力しました。

秋山祐子（ピースデポ）、田巻一彦（ピースデポ）、中村桂子（ピースデポ）、丸茂明美（ピースデポ）、青柳絢子、大澤一枝、津留佐和子、中村和子、林公則、梅林宏道